

仮面ライダー ホロス

酢トリー マー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全ての戦いが終わった。機神鳥の物語。

目 次

第1話【誕生する神話、ホロス】	1
第2話【解明、ホロスの謎】	6
第3話【大惨事、オーバーヒート】	10
第4話【必殺、正義のキック】	14
第5話【世間、新たなブレイキンド】	18
第6話【誕生、人類の力】	23
第7話【判明、???の正体】	26
第8話【探検、ホロスの遺跡】	30
第9話【ある日、突然に】	32
第10話【ホロス、制御不能】	35
第11話【爆誕、新たな力】	38
第12話【再起、謎の始まり】	41
第13話【転移、謎の……】	43
番外編【ホルスードとホロス】	48
第14話【転移、もう1人の神がいる世界】	51
第15話【巨大、迫りくる悪】	59
第16話【悟り、決心の刻】	65
第17話【突入、ブレイキンド殲滅作戦】	73
第18話【黒神、ひとつになる刻】	79
第19話【対峙、もう1人の神】	86
第20話【最終決戦、未来への道】(1)	91
第21話【最終決戦、未来への道】(2)	96
第22話【最終決戦、未来への道】(3)	101
最終回【最終決戦、未来への翼】	104

第1話【誕生する神話、ホロス】

「あつちい～」

俺は飛滅 械都（ひめつ かいと）。みんなには字が読みづらいだとか厨二臭いだとか言われてるけど、それは俺のせいではない：話がそれちまつたな。

今日はクラスの友達と色んな山に登ったり、海に潜つたりする。冒険をするんだ。

友「おまえまた頭ん中ポエマード状態だろ、少しほこつちを手伝えよつ」

こいつは俺が大学に入つてからの1番の友達の山内。心強くて頼もしいが、俺の頭や心を読んできやがる。

飛「すぐそつちに行く」

今は山に登る準備をしているところだ。どうやら最近、今登ろうとしているこの七条山に洞窟を見つけた…という俺の名前が厨二臭いってことで近づいてきて友達になつた陰道。こいつも充分厨二臭い名前だと思う。ちなみにこいつはインターネットに強い。それで色んな山を調べたところ、見つけたらしい。

山「おい、お前が頭ポエマーになつてるあいだに準備終わらせたぞ」
飛「ああすまない…つてそれはおまえが勝手にそう思い込んでるだけだろ」

山「顔みたらだいたい分かるぞ、だつてお前単純だし」

ツツコミたいが、我慢することにした。

「まだ着かないのか…？」

俺は陰道に聞いた。

陰「ここを右に行けば…つて目の前にあるじやん！」

またやつてしまつた。しかし今更なので反省はしていない。
その洞窟に入ると入つてすぐに変な像があつた。

飛「これは…鳥？と…ピラミッド？」

山「エジプトみたいだな、エジプト好きが作つたのか？」
しかし俺は違和感を感じた。なんというか…こう…変身！つて感

じの頼もしいような…感じのだ。

さらに奥に進むと分かれ道になつていた。

飛 「男は黙つて真ん中だろ！」

陰 「えゝ私も真ん中行きたいゝ！」

飛 「いいやこゝはもう俺が入るつて決めた！…というかおまえ女だろ？」

陰 「あゝ今の差別になるよゝ？」

飛 「なんだと？」

いつもならここで山内が仲裁に入るのだがもう進んでいた。

飛 「おい！山内！あーもう！陰道！お前は左だぞ！」

おれは真ん中に進んだ。が、何も無いまま合流した。

飛 「大したことないな、おつ光が見えるぞ？」

山 「外の光か…？それとも…ホ…」

山内の様子がおかしいがどうせ怖がらせるためだ、しかし、外の光以外に洞窟で見られるホつてなんだ？と思いつつも光がある方へ行くと、そこには小さなピラミッドと鳥、そして何かを改造するようなくさんのが工具や拘束器具があつた。

山 「クソ…もうない…おかしい…ホロ…はどこだ…あそこの棺桶はなんだ、なんだ？」

山内の様子がもつとおかしくなつた。異常だ。と思つていたら、山内が棺桶を無理やり開けた。

山 「いだぞおゝ！！ホロス！！滅べ滅べ！消してしまえ！！」

山内が暴れ出すと同時に山内の手には何かを持っていた。

『ウジャト…！…ゴッドブレイク!! 破壊 The ライダー!!!』

山内は目のような異形の化け物になつてしまつた：

陰 「かつこいい…怪人みたい…」

そういえば陰道は怪人とか変身物とかが好きだつた。しかし、見ている場合ではない。

ウ 「ウガアアア!!!!」

棺桶の中に入つていた者をこちらへ投げてきた。

飛 「危ない!!」

棺桶の中の者は簡単に崩れたが、何かの物が背中に当たった。

飛 「痛てつ！なんだこれ？」

陰 「それ！なにかに変身出来るよ!!」

陰道はワクワクしているがそれを見せびらかしている場合ではない。

飛 「とりあえず逃げるぞ！」

俺はそれを持つて逃げ出した。

飛 「陰道！真ん中の道から行くぞ!!」

真ん中の道から行くと行きには見えなかつた、なにか光つてゐるボトルと拳の形の物を見つけた。

陰 「はあ…はあ…それ…そのベルトに挿すんじや…ないの？」

陰道はもう息切れしてゐる、陰道を連れて逃げれる気がしない。

飛 「よし！やつてみるぞ！陰道は下がつてろ！」

おれは拳にボトルをさした。

『カミングホルス！』

続けてベルトにさし、横にあるレバーを回した。が、何も起きない。

陰道 「そういうのは回したら変身！つて言わなきゃ!!」

飛 「やつてみる!!変身!!!」

『アルケミストマツチ!!神話再生!!ホルスバードTheホロス!!!』

飛 「なんだ!?左手が動かしづれえ！つてロボットアームになつてる！」

陰 「変身する時にほろすつて言つてたから…仮面ライダーホロスね

!!

俺はロボットアームを振り回して1発殴つた。

ウ 「グオオ…」

ホ 「なんだこれ！くつそつよいじやねえか!!うおおおお!!!」

俺はどんどん異形の化け物を殴つた。

ウ 「ホロスがあ…人間があ…!!!」

俺はその衝撃波を躊躇ずに吹つ飛んだ。

ホ「いつてえ…」のおお!!

口ボットアームで殴ろうとした。が、腕が上がらない。

ホー重すぎるんだよ!!!

「何で異形の仕事に特化したんだ？」
ホークス「調子に乗るな!!」

なんとか気合いでぶつ飛ばしたが、もう主戦力のロボットアームは

使い物ならない
陰「もつかハレバリを回して!!!

何となくわかつた、必殺技つてやつだ。

亦「うおおお!!! 山内を返せ!!!」

『Break punch! アルケミストブレイニッショウ!!!』

ウ「まさか…先に復活し、現代を理解した我らに勝とうとは…これ

で終わりとは…

「グワアアアア!!!!」

翼形の化け物は山内を排出し、衝撃波を出しながら散つていつた…

械都（ひめつ）かいと

新潮大学（しんちようだいがく）に通っている大学生。

が悪く、思つたこと言い、頭ボエマーのバカだが、仲間思いで死ぬ？らしいの大膽な行動に出ることが多い。

山内 護（やまうち まもる）

同じく新潮大学に通う大学生。

らしく、サバイバル知識等が豊富。

陰道 サナ（いんどう　さな）

同じく新潟大学に通う大学生

二病臭かつたり等、思わぬ一面をもつ。人見知り。

仮面ライダーホロス

古代から封印されていたとされている。左腕のロボットアームは時代によつて形を変えていたらしく、棺桶に入つてゐる時は日本刀のような刀の形をしていた。再生能力が非常に高く、核弾頭にも耐えるという噂。

身長200. 1cm

体重80. 3kg

パンチ力（右手）1. 0t （左手）10. 6t

キック力 5. 0t

ジャンプ力10. 9m（ひと飛び）

走力 7秒（100m）身長200. 1cm

必殺技アルケミストファイニッショ

ウジヤトブレイキンド

ラーの左目と記載されている。こちらも再生能力が高く、並の攻撃じや傷つかない。ブレイキンドはこの他にもいると思われる。

身長体重等、不明。

第2話【解明、ホロスの謎】

「なんだ？これ」

俺たち3人はホロスシステムに夢中になつていた。

山 「なんだこれ？陰道、またおもちゃ持つてきたのか？」

陰 「おもちやじやないよ！本物！！」

山 「んなわけwなあ？械都？」

飛 「いや、本物だぞ」

山内は俺を心配した。

山 「おまえ…頭だけじやなくて……」

飛 「違う!!!これでおまえを助けたんだよ!!!」

山 「そういうえば…洞窟の記憶が曖昧だな…なんかボトルと銃みたいのがあつて陰道が喜びそうだなあ…って思いながら持つたら…」

飛 「どのぐらい覚えてるんだ！」

山 「そんなに焦んなくても…確かにみんなと合流して…棺桶を開けて…目みたいなんに閉じ込められて…」

飛 「変身すると記憶が無くなるのか…」

山 「ところで本物つて言うならそれで変身して見せてくれよw絶対驚かないぜw」

山内は絶対信じていない。

飛 「変身！」

俺は仮面ライダーホロスになった。

山 「うおつ!!本物だっ!!!ま、まあ…信じてたけどな!!!」

山内は明らかに驚いているがそつとしておこう。

俺は変身解除した。

陰 「そろそろ調べようか」

陰道はくぎりをつけた。

陰道「まず、ホロスはどこから来たのか？それとスペックについても知りたいよね」

飛「そりやエジプトっぽかつたし、エジプトじやないのか？もしくは2次元」

場は凍りついた。

山「安直すぎないか？あと2次元つて…」

陰「まあ、わかんないしね…じゃあスペックについて調べようか…」

俺は再びホロスになつた。

陰「じゃあ右手でその握力計を握つて？」

俺は力いっぱい握つた。壊れてた。

陰「まあ当たり前か？」

陰道はいつ使うために作つたのか分からないマシンを持つてきた。

陰「私が密かに作つてたこのパンチ力分かるマシーン!!これなら1

5tまでなら耐えられるよ！」

山「ネーミングセンスは相変わらずねえな…というか未来視か…？」

俺は山内を無視してパンチマシーンにパンチした。

陰「右手は…1・0t…結構弱いね、今度は左手でお願い」

俺は左手でパンチした。

陰「10・6t!?すごいよ!!!」

俺は何が凄いのか分からぬがとりあえずガツツポーズをした。

陰「次はそこにキックして！」

キックした。

陰「5・0t…基本的にはロボットアームを使つた方がいいね、次は100m走を…」という感じで身長や、体重、ジャンプ力や、必殺技まで測られた。

飛「疲れた…」

山「ようやく終わつたか…暇だつたぞ」

飛「でもこれでどんな戦い方…」

「キャー！」

話していると、校庭で煙をあげながら物が崩れていのを見た。

エ「はつはー！女の悲鳴は最高だなあ!!!これでクソ上司とも社畜生活ともおさらばだせえ!!!」

俺たちは急いで校庭に出た。

飛「好きにさせてたまるか!!変身!!」

『カミングホルス！アルケミストマツチ!!! The ホロス!!!』

おれはホロスになつて敵に急接近しようとした。しかし、疲れていて全力が出せない。

工「馬鹿にしてんのか!!!」

相手は、こちらに酸性と思われる物を、こちらに撃つてきた

アーマーが溶けそうになつてゐたがすぐに回復した。

ホ「なら…！」

俺は無理やり相手に近づいた。

エー、ちに来るなあ！俺はこの力でクソ上司の言いなり生活を終わらせるんだあ！！」

ホ「可哀想だが、罪な
俺はレバーを回した。

『アルケミストファイニッシュ』

工 「いやだああああ!!!!社畜のままなんて嫌だあ!!俺にもつと力…を

1

異形の化け物は溶

「おい！どうしてくれるんだ！！！おまえのせいだ！！！俺は！！！」

氣絶した。

哀想だと思うが悪しき力に頼るのは間違いだ。俺はそう思つ：

「おまえ、また頭ボエマーだろ」

卷之三

内
うやらブレイキンドシステムを使うとその記憶はないらしい。

身物が好きなだけにホロスについてもつと詳しく知りたいらし

い
。

エジソンブレイキンド

なんでも溶かすという噂の酸性を放出する。今回変身していたのは上司の言いなりにされている可哀想な社畜。身長体重等は不明

第3話【大惨事、オーバーヒート】

「痛てててて」

筋肉痛になつた。当たり前だ、あんな重い左腕をぶん回していたら筋肉痛にだつてなる。

山「もつと戦い方を考えた方がいいんじゃないか？」

飛「戦い方つて言つたつてあの重さ、お前には分かんねえだろ」

山「だつたら今体感してやる、こうすれば出来るんだろ？」

山内はいつの間にかホロスドライバーを腰に着けていた。

山「変身！」

だが、ホロスドライバーは反応しない。

山「もう一度！変身!!」

今度はホロスドライバーが吹つ飛んだ。

山「なんで反応しないんだ？」

陰「一度、あの化け物になつたら変身出来ないとか？」

山「じやあお前がやってみろよ」

山内は半ギレで陰道にホロスドライバーを渡した。

陰「変身!!!」

が、反応しなかつた。

山「ほらな！違うだろ？」

陰「きっと械都にしか反応しないようになつてるんだよ」

山「ずりいなあ」

山内は落ち込みながらテレビをつけた。

テ「最近、水難事故が非常に増えていますので注意してください。

近隣では謎の影を見たという声も上がつており、UMA保護委員会ではネッシーではないかと…」

山「くだらねえ、みんな注意が足りないだけだろ」

陰「そうだといいんだけど…」

山「そういえば今、夏休みだな。海にでも行くか？」

俺は左手を使わないように起き上がつた。

飛「いや、ここはあえて水難事故が多いという場所に行つてみよう」

陰「それいいね!! それなら事故の正体もわかるし、水辺にも行けるわ！」

陰道はやけに乗り気だった。

（次の日）

俺と山内は先に行き、準備していた。

山「今日は手伝えよ」

飛「ああ、わかってる」

山内と2人でバーベキューの準備した。

時間になり、陰道が来た。

陰「準備終わつた？」

山「ああ、ちょうど終わつたところだ」

陰「水着は？」

山「一応持つてきた」

陰「械都は？」

飛「親に言われたから一応…」

陰道がのりのりだ。こんな陰道見た事ない。

陰「じゃあ、先入つてからバーベキューの準備よろしくね♪」

山「おい！ あぶねえぞ！ ……仕方ねえやるか…」

俺と山内は肉焼いていた。すると陰道が震えて戻ってきた。

陰「ネ、ネッシーよ……」

いつもならネッシーだあ！ ぐらいテンションが上がるはずなのに何かおかしい。

飛「一応行つてくる。変身!!」

『アルケミストマッチ！ The ホロス!!!』

俺はホロスになつた。

ホ「流石にホロスでも水中は遅いか…」

俺は水中を見て回つた。すると、

「キシャアアアアア…」

「キシャアアアアアアアア…」

ホ「クソ！ 真上が!!」

上を向くと何もいなかつた。

ホ「どこだ…」

ネ「キシャアアアア!!!」

ホ「そこか！」

おれは左手で殴った。

ネ「キシャアアアア…」

ネツシーらしいものはダメージを受けたがその長い首で俺に攻撃してきた。

ホ「ぐつ…」

俺はとっさに左腕でガードした。

ホ「こうなつたら！」

『アルケミストファニッショ!!』

…しかし、不発に終わつた。

ホ「ならもう1回！」

しかし、レバーを回しても反応しない。

ホ「1回の制限か…」

ネ「キシャアアアア!!!」

さつきの弱々しい声からは想像出来ないほどの凄まじい声をあげながら突進して來た。

ホ「ぐわあ！」

左腕でガードしたが、ダメージを食らつた。でも、回復するから大丈夫だ：回復が始まらない。

ホ「なぜ!?」

すると頭の中に何かピーンと來た。

ホ「水中じゃ回復しない…」

ネツシー「キシャアアアア!!!!」

ホ「こんなときには！」

俺は左手で何度も殴った。何度も。何度も。すると、

『オーバーヒート!!バースト!!』

ホ「!？」

俺は考えようとした。しかし、

考えるより前に左腕が爆発した…

?????????と隠道

うやろ新しい水着が着たかつただけのようだ。

第4話【必殺、正義のキック】

「どこだ？」

左腕が爆発した、そこからの記憶が無い。

山「大丈夫か？」

山内が言うには、俺が向かつた方向から急に爆発音がしたらしい。
その後、流されてきたという。

飛「左腕は!?」

なにも変化はなかつた。

山「左腕がどうしたんだ？」

飛「左腕が爆発したんだ!!」

陰「確かに流されてきた時、左腕がなかつた」

山「でも、械都には左腕がついてるじやねえか」

山内の言う通りだ。だとしたらあれは夢？それともホロスの能力

?俺はふと思い出した。

飛「ネッシーは!?」

陰「ネッシーなら、煙をあげながら消滅したわ。それとこれ」

陰道は俺にボトルを渡した。

飛「これは？」

陰「ホロスが：械都が持つてたの」

俺が：？本当に記憶が無くなっている。

飛「そうだな。さんきゅ」

おれはボトルを受け取つた。その時、

「キヤー！」

悲鳴が聞こえた、俺は急いでホロスになつた。

『Theホロス!!』

ホ「今度こそ!!」

俺は腕をぶん回して気合を入れた。が、違和感がある。

ホ「いつもよりも：軽い？」

見てみると左腕のロボットアームは右手と似たような形の普通の
腕になつていた。

陰 「ロボットアームがない…」

山 「どうやつて戦うんだ?」

ホ 「文句を言っている場合じゃねえ! とりあえず行つてくる!!」

俺は水中に潜つた。

(ネッシーは倒したはず…2体いたのか?)

ネッシーは姿を表さなかつた。

ホ 「去つたのか?」

すると、弱々しい声で正面から出てきた。

ホ 「さつきまでは…!」

俺はとつさに左腕でガードした。が、ロボットアームではない。

ホ 「ぐああ!」

俺は大きくぶつ飛ばされた。

ホ 「どうやつて戦えば…」

考えていると下から声が聞こえた。

ホ 「そこか!」

下を見たが何もいない。

ネ 「キシャアアア…」

いつの間にか後ろにいた。

ホ 「なつ…ぐはあ!!」

俺はかなりダメージを受けた。

その時、頭にピーンと来た。

ホ 「ボトル…」

俺はブレイクナックルに装填されているボトルをホルスボトルからUMAボトルに付け替えた。

『神話覚醒!!アルケミストマッチ!!! UMAワープTheキック!!!』

音声とともに体が軽くなり、視界も変わつた。

ホ 「これなら…!」

俺は音をよく聞いた。すると、後ろから声が聞こえた。

ホ 「これはフェイクだ…そこか!」

俺はとつさにキックしてしまつた。

ネ 「キシャアアア!!……」

ネツシーは苦しんだ。どうやらこのフォームではキックが強化されるらしい。

よく見ると胸のアーマーも形を変えている。

ホ「だから軽いのか…！」

ネ「キシャアアア…キシャアア…キシャアアア！キシャアアア

…」

急に色んなところから声が聞こえ始めた。

ホ「!?どこだ？」

ネ「キシャアアア!!!!」

後ろだ。俺はキックした。が、いない。

ホ「?」

ネ「キシャアアア…!!」

ホ「ぐつ?!」

俺は吹っ飛ばされた。今なつたこのフォームに完全になれた訳では無い。

しかし、視界の左下になにかを計算しているような物が出てきた。

ホ「なんだこの難しそうなやつ…」

その間にまた吹き飛ばされた。

ホ「ぐつ…おつ？」

左下のモニターの計算が終わつたようだ。

ホ「この化け物は水の中で声を反射させる能力で相手を混乱させる

…そういうことか！」

またなにかピーンときた。

ホ「こうだな！」

俺は胸アーマーから衝撃波を出した。すると、ネツシーの声が一方向から聞こえた。

ホ「そこか!!」

『アルケミストフィニッショ!!!!』

俺は小刻みにワープを繰り返しながら必殺技をネツシーに当てた。

ネ「キシャアアア…キシャアアア…!!!!」

ネツシーは苦しながら沈んでいった。

面ライダー ホロス　UMA キック
M A ボトルをブレイクナックルに装填し、変身した姿。ワープ
や????????????????????????????
分析能力をもつ。

身長 200.0 cm
体重 79.6 kg

パンチ力 2.0 t

キック力（右足）5.0 t（左足）30.0 t

ジャンプ力 30.6 m（ひと飛び）

走力 4 秒（100 m）

必殺技 アルケミストファイニッショ

ネッシー ブレイキンド

大型のブレイキンド。かなり強い精神じゃないとブレイキンドに乗つ取られてしまう。突進や水中の高速移動。使用されていないが、衝撃波も出せるという。……しかし、ネッシー ブレイキンドは1体、もう1体のネッシーは本物だつたのか？

飛滅

左腕が心配。

山内

バーベキュー 焦げたじやん…

陰道

新フォーム!? かつこいい!! 見せてみせて!!

第5話【世間、新たなブレイキンド】

「はあっ!!」

今日も俺はホロスとして戦っていた。正直、かなり疲れた。誰か代わって欲しい。

山「最近多いな。体は平気か?」

山内はよく俺の体を気遣ってくれる。しかし、心配しすぎだ。

山「なあ、ほんとに平気か?」

飛「だから平気だつて。しかもおまえ、ライダーになりたいから心配してるんだろ。なれないつてわかってるのに。」

俺は少し強く言つてしまつた。

山「ああそりうだよ!俺は一度怪人になつた!でもおまえはライダーだ!正義だ!おれは悪役になつたんだ!」

山内もキレたような物言いだ。

飛「すまない、ついカツとなつてしまつ……」

説明しようとしたが山内はどこかへ行つてしまつた。
(部室)

飛「山内、さつきはその……すまない」

山「こつちもカツとなつてしまつた。ごめん」

互いに仲直りすると、陰道がやつてきた。

陰「見て!これ!」

テレビ

キヤスター『いやー、最近話題の化け物とヒーローについて世間では注目の的ですね!』

評論家『いやー、どうも信じられない。西映の悪ふざけか、いきすぎたファンでしよう。』

キヤスター『では、世間の声を聞いてみましょ。』

主婦A『いやー!かつこいいねえ!昔はあーゆうの見てましたよ!』

今は子供が見てるから一緒に見るんですけど、あれつて番宣かなにかなの?』

サラリーマン『あいつは悪だ!!俺の計k……そう!家族を奪つたんだ!!あと少しで!あと少しで!』

山『おいこいつ、エジソンのやつじゃねえのか?』

飛『まあほつとけばいいだろ』

子供『ダサい!!?悪いやつの方がかっこいい!!?!!?』

母親『こらつ!ははつ、すいません…うちの子ルイダーよりも怪人とかの方が好きなんですよね~、変わった子でしょ?』

(ルイダーとはホロス世界の変身ヒーローの事である。)

キヤスター『街では様々な意見が出ましたね』

評論家『ふん…いつかは犠牲者が出る、全部守れるわけじゃないだろ』

飛『なんだこのおっさん!』

陰『落ち着いて!』

落ち着いた。しかしあのおっさん、まるでこの先もブレイキンドが出るような言い方だつた。

山『お前も怪しいと思うか?』

飛『ああ…』

部室にしばらくの沈黙が訪れた。すると陰道が口を開いた。

陰『じやあ張り込みしようよ!!』

飛『いや…それh…』

山『いいなそれ!!』

忘れていた。こいつらは馬鹿だつた。

山『おい械都、また俺達のこと馬鹿って思つただろ。』

陰『ひどい!成績では械都が1番ひどいのに!』

いつものだ。確かに俺は成績はクラスでワースト1位2位を争うほどひどいことになつていて。しかし、成績面ではなくやることが馬

鹿と言いたいのだが…まあめんどいくさいのではつといた。

陰『じやあ早速うさんくさい評論家がいるテレビ局まで行くぞー!

!』

山内『おー!』

そこまでする?俺はそう思つてひとつ聞いた。

飛 「どうやつていくんだ? ここからテレビ局まだ結構あるぞ」「これなら行かなくて済む! …はず!」

陰 「え? ホロスってライダーでしょ?」

飛 「…うん」

陰 「じゃあバイクぐらい持つてないの?」

飛 「? ……えついや、俺まだ免許持つてないし…」

陰 「平気だつてー、ほら! ないの?」

探ししてみるか:『アルケミストマッチ!』

俺はホロスに変身した。そうぽんぽん変身していいものなのか: 亦「これが?」

俺は腰についてた普通のボトルとは違う形状のボトルを出した。そしてキヤップを前に向け、押した。

『ドライビングワインガーバー!!』

ボトルはバイクになつた。

陰 「ほらー!」

そういう所では流石だ。

俺たちは評論家がいるテレビ局へ向かつた。
「テレビ局」

飛 「張り込みつてこんな地味なのか?」

俺は退屈した。正直帰りたい。

陰 「そんな君にはー? これ!」

陰道が渡してきたのは牛乳とアンパンだ。

飛 「えっ」

俺は非常に困惑した。帰りたいと言おうとした時だ。

評論家「おつかれ。あとは任せろ…」

うさんくさい評論家は誰かと電話していた。

陰道は俺に伝えた。

陰 (きつと今のが悪いやつとの会話だよ!)

陰道は小声で言つてきた。

飛 (会社の電話かもだろ! ホロスを批判しろとか言われてるんだ

そう、こここそ少し口論になつていると、評論家がこつちを向き、二
ヤついた。

飛（ばれたか!？）

その時だ。向こうから黒色の怪人が現れ、評論家を襲つた。

評論家「た、助けてくれー！」

飛「しかたねえ！ 気に食わねえが助けてやる！」

『アルケミストマツチ!! Th e!! ホロス!!』

俺は変身し、黒色の怪人に殴りかかった。

ホ「なんだこいつ！ 右半分は怪人だが、もう左半分はルイダーフボ
いぞ！」

相手の怪人サイドはもがき苦しんでいるが、ルイダーサイドは戦う
気マンマンのようだ。

ホ「こいつ！ 左右で意識とか、色々違うのか!?」

困惑していると、相手は紫のオーラを纏つたパンチを繰り出してき
た。

ホ「ぐつ……！」

結構体に負担が来ている。俺はそのまま、地面に膝をついた。
すると、後ろから新たなブレイキンドが来た。

ホ「次から次へと……！ 今度は左が怪人で、右が緑のルイダー！」

俺は身構えた。しかし、緑のブレイキンドは黒のブレイキンドへ向
かひていき、戦い始めた。

かひ「今のうちに！」

俺は逃げた。

道「結局あの化け物はなんだつたんだろうね」

内「やつぱり平気じやないじやねえか」

滅「基本フォームは腕に、UMAキックは足に負担がくる……」

ブレイキンド（黒）

パンチ力がホロスと同等という、かなり強いスペックを持つ。それ
以外は分からぬ。右は通常ブレイキンドの様に醜い化け物だが、左
はルイダーのような整つた姿。

???ブレイキンド（緑）

まだ全てが謎。

こつちは左が化け物、
右が整っている。

第6話【誕生、人類の力】

飛「なんなんだ…あのブレイキンド…」

俺達は困惑していた。右と左のブレイキンド、仲間のはずなのに戦うブレイキンド、ルイダーハーの様な見た目、全てが謎だった。

陰「と、とりあえず評論家は犯人じやなかつたね…」

山「ああ…でも、ホロスが負けちまつた…あの評論家なんて言うかな…」

俺達はテレビをつけた。すると、既に口論していた。

キヤスター『どうしてそんなに批判ばかりするんですか!?』

評論家『批判じやない！事実だ！あの時、あのヒーローもどきは負けた！俺は見たんだ!!あいつは番宣の為なら批判するやつや、一般人を巻き込む悪魔だ!!!』

陰「悪魔…ねえ…」

陰道は一旦テレビを消した。

山「あんな物言いはないよな!!なあ！械都!？」

俺は沈黙した。確かに守れなかつた。相手が内面にダメージを受けていたら…そう考へると、あの人の言つてる事が正しく思えた。

山「もしかしてお前、あいつの言つことが正しいと思つてないよな

?」

飛「あ…ああ…」

山「いや、お前はそう思つてる。いつもそうだ、お前は馬鹿だし、口悪いし、死にかけるようなことをするが、相手の心配を先にする。多少は自分の事とか考へてもいいんじやないか?」

飛「でも…」

山「でもこんな体じやないか」

そう言つと山内は俺の腕を叩いた。

飛「ぐう…!?」

山「ほらな、少しほは休めよ。」

飛「ありがとう…」

俺は寝た。

「械都（ホロス）の夢の中」

???『お前は、ライダーなのか…？その程度の力でライダーがつとまるのか？俺が見てきたライダーは、自身の記憶が無くなろうとも戦うやつや、相棒を信じ、共に乗り越え、互いに進化するライダーだつたぞ…その顔…私の事がわかつていな…？仕方ない、名乗るのはあまり好きではないが…私の名は…一仮面ライダー…一だ。あと少しでホロスシステムを上回る、…一システムが完成する…その時までせいいぜい弱いなりの知恵を出して人類を守るのだな…』

山「どうどう死んだか？」

山内は俺が目覚めるなり失礼なことを言つてきた。

飛「生きてるに決まつてんだろ…」

陰「疲れは？」

飛「ああ…だいぶとれた」

山「じゃあ…」

陰道は会話をさえぎりテレビを見させた。

『政府が今日、対怪人組織を建設しました。』

飛「えらい急だな」

陰「前からまだかまだかとは言われてたけど昨日のホロスの負けが原因で作られたらしい…多分」

評論家？『私たちは今！あのヒーローもどきに頼らない組織を建設致しました！それがこちらの、 エレメンタル でござります！』

山「あの野郎！こんなに偉いやつだったのか！」

飛「いや…あの評論家とは違う気がする…ほら、 髮型とか」

山「いや！こんな時だ！髪型ぐらい変える！」

口論になりかけた所で陰道が止めてくれた。

陰「2人とも静かに！」

評論家？『あのヒーローもどきを圧倒的に上回る力を持つ、 ライダー…いや、 兵器を開発しました！それがこちらの フブキ／クリムゾン です！』

記者『エレメンタル、 そして吹雪とクリムゾンなら、 風や、 雷等も

出るんですか!?』

評論家?『それはこいつ次第です!活躍すれば量産、活躍しなければ破棄、そしてウインド／スパークを作ります!!』

山「なんだあいつ!自分でヒーローもどきとか言つてたくせに!
自分はヒーロー作るのかよ!」

陰「まあまあ…」

「おい…そんなのどうでもいいからまた張り込むぞ」

山「どうでもいいってなん…お前が自分から張り込みたいってなん
か分かったのか?」

「ああ…決定的な物をな」

假面ライダーフブキ／クリムゾン

人工の假面ライダー。雪や氷を扱い、遠距離攻撃や殺傷能力に長け
たブキ、溶岩や火炎を扱い、近距離攻撃や打撃能力が長けたクリム
ゾン、しかし、パンチ力等は測る前に器具が溶けたり、凍つたりして
計測不能。

假面ライダーフブキ

身長200・1cm

体重50・6kg

その他不明

假面ライダークリムゾン

身長201・8cm

体重60・9kg

その他不明

第7話【判明、???の正体】

「ああ…決定的な物をな」

そう言い、俺は張り込みを再開した。

飛「2人はブレイキンドから逃げた評論家を見てくれ」
そう言うと、昨日の時間まで待つた。

評論家「なに…いや平氣だ。さらばだ」

飛（出てきた！）

俺は騒ぎたて、評論家の視線をこっち向けた。すると、
評論家「うわー！助けてくれー！」
評論家は逃げ去った。

飛「あとは任せた2人とも！変身！」

『アルケミストマッチ！The！ホロス!!』

今出ているのは黒の方だ。黒の方はパンチ力がすごい。しかし、若
干鈍臭い。

『ハアー！』

黒いのはパンチを繰り出した。

ホ「今だ！」

俺は黒いの背中を殴つた。

『グア！』

俺はすかさずフォームチェンジした。

『UMAキック！The！キック！』

ホ「お前は隙が大きい！それがお前の敗因だ！！はあ！！」
『アルケミスト！ファニッシュ！』

ホ「はあー！！」

『グアアアアア!!!』

しかし、まだ完全に倒れたわけではなかつた。

『グウ…マダカ…』

黒いのは何かを狙つてゐる。俺はUMAキックの能力であたり一

体に分身を出し、ワープさせた。

ホ「終わりだ、これでどつかで戦闘が起こればそこにいる。」

『サスガガキダ』

!?

俺は考えるよりも先に吹つ飛ばされた。
なぜだ、トラップは撒いたはず。なぜだ

ル『答えはこれだ』

相手は風を扱っていた。

ホ「ぐつ…分身も完全じやない…風には反応しなかつたか！」
ル『ご名答。正解したご褒美にいいものを見せてあげよう。』
それは見たことも無いベルトだつた。

ル『変身…』

すると近くで倒れていた黒いのを巻き込んだ

『デュアルブレイク……神話破壊!! ウィンド！ ラツキー！』

その怪人は完全にライダーの様な見た目だつた。

ホ「おまえも…ライダーなのか？」

ル『違う』

そう言うと相手は殴りかかってきた。

ホ「その攻撃は読めてる！」

しかし、避けられなかつた。

また避けれない。まだだ。

ホ「ぐつ…」

いつしかホロスにはダメージが溜まつっていた。

ル『なぜ避けれない…!?』と思う頃でしよう。何故か…それは風の力。

『私の名はルブダデュアルキンド…風と運の力で戦う物。いつしか6つの力を手に入れ、ライダーとして君臨するもの。』

ルブダはホロスを風に巻き込み始めた。

ル『痛いか？ 苦しいか？ これは今までブレイキンドが味わつてきた苦痛だぞ？ ほらほらあ…』

ダメージに耐えられなかつたホロスはネッサー戦闘が起こればの時のような、何も付いてない姿になつた。

ホ「ぐつ…」

ル『お前は今から殺される。そうだな…ただ殺すのもつまらないから悪役らしく、冥土の土産として教えてやろう。なぜあの時、お前を庇つたのか。それはこの姿になる為…。…………つまらない理由だな。自分で聞いてて特に何も感じない。普通に殺せばよかつたな…。まあいい、死ね!!!』

俺は紫のオーラを纏つた拳をもろに受け、吹き飛ばされた。

ホ「ぐふう…」

ル『まだ死なないか…』

ホ「そろそろかな…」

俺は変身解除した。

ル『舐めているのか？それとも確実に死ぬためか？まあいい、今度こそ死ねえ!!!』

ルブダが拳を振りかざそうとすると、パトカーらしき乗り物が来た。

ル『!?:まあいい、今更、警察」ときが何が出来る！』

???「おつと、警察じやないぜ？」

パトカーの中から現れたのはエレメンタルの人だった。

飛「間に合つたのか…」

?「おい坊主、逃げな。」

カツコつけているな…。そう思いながら逃げた。

ル『誰だ貴様!?』

?「俺の名前は二吉　臺参（にきち　だいざん）。またの名を、仮面ライダークリムゾン！変身！」

『調整!!メカニクスマッチ!!Y o u　a r e　f i g h t?　溶岩

パンチング！

仮面ライダー！　クリムゾン!!!』

二吉と名乗る人物は仮面ライダーに変身した。

ク「怪人ごときが仮面ライダーになろうとしてんじゃねえよつ

クリムゾンはお笑いのツツコミのような軽い感じで殴つた。

ル「グフオ?!?』

しかし、ありえない程のダメージを与えていた。

ク「デュアルキンドってその程度か？ヒーローもどきはこの程度にも勝てなかつたのか？」

イラツときたが確かに強い。

ク「これで終わりだな」

クリムゾンはベルトのレバーを回した。

『クリムゾン!! マグマ！ パンチ!!』

クリムゾンはルブダを殴つた。

ル『グゥウウウ!!!! グアアア!!!!』

『ドガーレーン!!!』

ブダは爆発四散した。すると、クリムゾンは動かなくなつた。

「ちつ、あの程度じや溶岩を温めきれないか：」

う言うと二吉は帰つていつた。

仮面ライダークリムゾン

メカニクスドライバーとホロスナツクル、ホルスボトルで変身するライダ^ア。他にワープ等特殊なことをするUMAキックフォームになる^ア。U^アMAボトル。バイクに変形するモーターボトルを所持している^ア。

仮面ライダークリムゾン

メカニクスドライバーとシェイクボトル（クリムゾン）で変身する。パワフルな戦い方が特徴。しかし、敵が弱すぎると溶岩が温まらず弱く、敵が強すぎると溶岩が温まりすぎて爆発する可能性がある難癖のあるライダー。

ルブダデュアルキンド

評論家？（エレメンタル代表）が変身。緑には代表。黒には無理やり変身させられた評論家が融合したデュアルキンド。

代表の目的は未知のホロスシステムを無くし、世間に自分の作ったライダーシステムを広め、暴走させ争いを起こそうとしていた。

第8話【探検、ホロスの遺跡】

「ホロスって結局なんなんだ？」

俺は唐突に疑問に思つた。俺はホロスに選ばれたが、ホロスのスベック以外何も知らない。

山「意外と調べたら出てくるんじやないか？」

飛「流石にないんだろ」

陰道はなぜかノリノリで話に入ってきた。

陰「じゃあさ！ホロスと会つた遺跡に行けばいいんじやない!?」

俺達は引き気味で賛成した。

♪七条山♪

山「久しぶりだなあここも」

俺達はすぐに遺跡に入つた。

陰「ここでホロスが誕生したんだよね♪」

飛「そういえばここで山内が怪物になつたんだよな」

山「俺は覚えてないけどな」

俺達はさらに奥に進んだ。棺桶の部屋だ、しかし前回とは何か違う。

飛「奥にあつた壁画が変わつてる…？」

前まではホロスだけだったがもう一体、ライダーのようなものが描かれていた。しかし、まだ完全ではないように見える。

山「だれかが落書きしたんじやねえか？」

飛「いや、ここは登山用の道とは離れてる、ここに来れるのは俺達みたいな山で探検するようなやつらか悪ふざけで登山用の道から離れたやつらぐらいのはずだ。しかもここは暗い。一度入つたことないどこまで来るのは難しいはずだ。」

陰「確かに変だよね、スプレーとかで描かれたようなのじやないし」
俺達は疑問を持つたが、一度部室へ戻つた。

♪部室♪

山「やっぱ調べてみたらどうだ？」

飛「しつこいな、分かつたよ」

俺はパソコンで調べてみた。

しかし、1件もヒットしなかった。

飛「ほらな」

山「お前の検索の仕方が悪い！貸してみる」と、1件だけヒットした。

山「な？えーと、ライダー史？」

サイトを開くと赤色のクワガタみたいなライダーや、似たような金色のライダー、紫の鬼のようなライダーや、線路みたいな口のライダー、コウモリのライダー、信号機みたいなライダーや、繁栄していたと思われる街？と、巨大なロボに乗ったライ…顔にライダーと書いてあるやつが映っていた。

飛「なんだこれ？たくさんライダーが映っているが肝心のホロスがいないぞ」

下にスクロールすると、別の画像があつた。

そこには、ホロスらしき姿があつた。しかし、ホロスは何者かに敗れたかのように、ボロボロだつた。

山「おい、これホロス負けてねえか？」

ホロスの上にはオレンジで、赤と青の券らしきものを持ったライダーがいた。

飛「遺跡にこんなやつはいなかつたはずだ…いや、壁画に描かれていたものと似ているように見える。」

山「まだ画像はあるぞ」

下にスクロールすると、真っ黒のホロスに見えなくもないライダーと、2色の紫の体に翠の目を持つライダーがいた。

それが何を指しているのかは分からなかつたな」「結局何もわからなかつたな」「まあいつか分かるだろ」

「うして、珍しく怪人が現れなかつた日は終わつた。

「絶対私の事忘れてるよね！」

?????????????陰?????????

第9話【ある日、突然に】

「うぐつ！」

それは突然起きた。

俺たちは山に来ていた、名前も分からぬよう山だ。

山「久しぶりだなあ、まともに部活動するの」

飛「確かに」

俺たちは普通に山を登っていた。

陰「今日も怪物が現れないといいね」

飛「そりやな、毎日現れないで欲しいぐらいだ」

山「俺達もなにか手伝えたらいいのにな」

すると、後ろから集団が来た。

飛「なんかのトレーニングか？」

それは二吉さん達の組織だった。

二「久しぶりだなお前ら、元気にしてるか？」

陰「知り合いみたいな口振りで話しかけて…」

二「だつてこの間会つただろ？ もう知り合いみたいなもんだよ」とすると二吉さんは集団から離れて、俺達に伝えた。

二「この山は怪物の巣窟みたいな場所だ、さつきも見かけた。そいつは俺がちやちやっと倒したけど他にも何体かいた。第1この山はもつと整備されてたはずだ、ココ最近でこんな汚くなるのはおかしい」

い

確かに周りにはゴミがころがっていた。

二「じやああとは頑張れよ」

二吉さんは集団に戻った。

飛「どうやら今日は戦わないといけないらしいな」

（山の休憩所）

休憩所についたが、やはりこの従業員はいない。

山「書き置きがあるぞ」

その書き置きには（この山は危険だ。早く降りた方がいい）と書かれていた。

すると悲鳴が聞こえてきた。

飛「どこだ！」

悲鳴は道から外れた場所から聞こえてきた、だがけもの道のようなものがあつた。

そこを辿ると遺跡のような場所についた。

飛「これは…？」

山「ホロスの遺跡っぽいけどずいぶんと汚いなホロスのとは違つてボロボロで今にも崩れそうだ」

飛「お前達はここで待つてろ。崩れたら危ない。」

俺はホロスに変身した。

／遺跡の中／

ホ「悲鳴が聞こえたのはこっちか」

俺はUMAキックの能力で人の音がする方へ進んで行つた。

ホ「？」

しかし、なにもなかつた。まるで元々何も無かつたようだつた。だが、そこに女性のものと思われる髪飾りが落ちていた。

ホ「これを調べれば…」

UMAキックの能力は凄い、そう思いながら調べていると奥から声がした。

俺は身構えた、UMAキックの分析によるところはブレイキンドの音らしい。

すると奥からエジソンブレイキンドのようなものが飛び出してきた。しかしそれはボロボロだつた。すでに何者かに大ダメージを受けているようだ。

ホ「二吉さん…いや、クリムゾンか？」
しかし、攻撃後は火傷や溶岩によつて溶かされたものではなく、植物に巻き付かれたり、酸性のもので溶かされた方が正しかつた。エジソンブレイキンドの特徴の右手のも取られていた。

エ「助け…」
すると奥からツタのようなものが伸びてきて、そのままエジソンブ

レイキンドを捕え引き戻した。

エ 「いやだ!!助けて！いやだあ！…」

奥からはシユーシューリーという溶かされる音と骨が碎けるような音や断末魔が聞こえてきた。

ホ 「うつ…」

俺はUMAキックの分析能力の画面で吐き気をもようした。もつとモザイクなどをかけてほしい…。俺はたちまち通常の姿に戻ってしまった。

すると、奥からエジソンブレイキンドを溶かしたと思われるブレイキンド？が出てきた。

ホ 「おまえか！エジソンブレイキンドを捕食したのは！」

しかし無言だつた。まるで意思がないように。

そいつはエジソンブレイキンドのような能力を持つていたが、姿はまるで違う。

ホ 「答える！」

俺は左腕のロボットアームで締め付けた。だがそいつはまるで攻撃することしか頭にないような感じだった。

ホ 「…ちつ」

俺はそのまま締め殺した。

第10話【ホロス、制御不能】

「……」

ホロスはそのまま相手を絞め殺した。だがそいつは倒されると同時に酸を撒き散らし、ホロスの装甲は変身解除まで溶けていた。

しかし、変身は解除されなかつた。

飛「……!?、俺はホロスになつて…」

俺は気を失つていた。ホロスになつて敵を掴んだところまでは覚えている。

飛「そうだ、みんなに伝えないと！」

だが自分の意思では変身解除することはおろか、ホロスを動かすことも出来なかつた。だが、ホロスはどころかに歩いている。

飛「おい！どうなつてんだよ！待て待て待て！止まれ止まれ！」

どんなに体を動かしてもホロスは止まらなかつた。まるで自分が別空間にいるかのように。

ホロスは今回の騒動と思われるブレイキンドを見つけた。

飛「まあ…このままブレイキンドを倒してくれるならありかもな…」

するとそのブレイキンドは酸のようなものを吐き出した。

飛「あれは…!? ネツシーブレイキンド…!」

酸は形を変えネツシーブレイキンドのような姿になつた。

ホ？ 「……」

ホロスは先程の戦闘でくらつたダメージを回復させずにつつこんだ。

飛「おい！危ない！」

ネツシーブレイキンドの超音波は酸を撒き散らす攻撃になつていった。だがそれをものともせずネツシーブレイキンドに飛びかかつた。

ネ「……」

ホ「……」

無言の戦いがしばらく続いた。

飛「これは…」

いつの間にか周りは酸で囲まれていた。

飛「流石に回復待つよな…」

だがホロスはそれを一切氣にすることなくつつこんだ。

飛「いつ…！」

とうとう酸のダメージが自分にも伝わってきた。
だがホロスはそれをお構い無しに戦う。

飛「ぐつ…！」

ホロスはずっとロボットアームしか使ないのでそろそろ腕の限界が近づいてきた。

ネツシーブレイキンドもどきとの戦闘は一切終わる気配がない。
まさか、わざと倒さずに戦うのをたのしんでいるんじゃないのか？と思つたが今は実害の方が多すぎて全然頭が回らない。

飛「やめてくれ…ホロス…」

あのあとさらに戦いは激しくなつた。もう俺の腕は既に限界を超え脱臼した。

足もボロボロだ。

ホ「……ハツハツハツハツハ

さつきからホロスからわずかに笑い声が聞こえていた。

飛「だれかいるのか!?」

すると辺りは暗闇に包まれた。そして痛みも消えた。まるでこの間寝ていた時かのように

???「貴様ごときにこの力は勿体ない。私が戦闘の道具として使つてやろう。」

飛「おいお前！いきなり出てきてだいぶ失礼だな。あとその口ぶりからするに、おまえだな？ホロスを乗つ取つてているのは」

???「バカにもその程度はわかるか」

飛「初対面でバカはねえだろ」

???「まあなんでもいいおまえはもう用済みだ。散れ」
そいつはなにかやばいのを飛ばしてきた。

??「危ない」

???「だれだ、我が野望を邪魔する愚か者は」

?? 「ホロスには今後重要な役目がある。まだ消す訳にはいかない」
こいつは夢に出てきたやつ！だけどまだ話しかける訳にはいかない、しかしホロスの重要な役目って…？

?? 「これはもう私のものだ！」

?? 「神の道具とその器に傷を与えた罪、今ここで償つてもらう」
夢の中で出会ったやつは神々しいなにかを飛ばし、乗つ取つてたやつを一瞬で光に変えてしまった。

飛 「あ、ありがとうございます」

?? 「じゃあな」

冷たいやつだなあと思いつつも俺はいつの間にか戻っていた。

飛 「痛て…！」

戻つてしまつたので身体のダメージが急に来た。
だが、ホロスの制御はきく。

ホ 「よおし！反撃とさせてもらうぞ」

第11話【爆誕、新たな力】

ホ「はあ!!」

俺は夢であつたやつに力を貰っていた、その力はとてつもなく強かつた。

ヴ「ぎ”い”い”い”!!!!」

ホ「うつ！」

でつかいのは声にもならないような叫び声をあげ、洞窟が崩れた。

ホ「うわー！」

：

俺は瓦礫の下敷きになつた。再生能力があるからダメージはそこまでないが。瓦礫をどかすには力が足りない。夢のやつの力も、瓦礫適度では使いたくないと思つていた、が

「きゃー！」

ホ「そうだ！洞窟の外には陰道や山内が！」

俺は少ない脳でどうやつて助けるか考えた。

ホ（この力を使えばでつかいやつを倒す力がなくなる…、だが力を使わないと抜け出さない…どうすれば！）

???「なぜ力を使うことばかりを考える」

夢のやつが今度は脳に話しかけてきた。

ホ（気持ちわる！…力を使う以外になににあるのか？）

???「本当にバカだな、なぜ蓄えようとしてしない」

ホ（そうか！その手があつたか！）

???「お前とは近々会うことになるだろう」

ホ（おう！また今度なー！）

俺は力を蓄えることに集中した。しかし、中々上手くいかない。

ホ「どうすれば…」

するとでつかいやはつは山内をはじき飛ばした。

山「うぐつ！」

山内はかなりぶつ飛ばされ、意識失つた。

ホ「山内…！」

俺はどうすることも出来なかつた。

陰 「キヤー！」

でつかいやつは陰道を捕食しようとした。

ホ 「やめろー！」

俺の想いがホロスのシステムに響いたのか、ホロスは突如金色に光り始め、瓦礫を吹き飛ばした。

ホ 「やめろ…！それ以上陰道に触るな！」

ホロスからはマントが生え、目が黒に染まつた。

ホ 「消えろ…！！」

ホロスのマントはキラリと輝いた。するとヴァイオブレイキンドの触手はすべて吹き飛んだ。

ホ 「ぼくも「はあつ…！」

ホロスは陰道を回収すると、ロボットアームを構えた。

ホ 「倒されろ!!」

ホロスのロボットアームは巨大な幻によつて巨大化し、ヴァイオブレイキンドをひねり潰した。

ヴ 「ぎ” い” あ” つ”

ヴァイオブレイキンドは完全に消滅、変身者も残さず塵となつた。

ホロスの目はオレンジに戻つた。

ホ 「山内は！」

山内は一命を取り留めてはいたが今にも死にそだつた。

ホ 「ホロスは再生能力が高い！マントをつけられ！」

ホロスはマントを取り、山内に着けた。

すると山内はみるみるうちに傷が治り、意識を取り戻した。

山 「!?でつかいやつは⁈」

ホ 「もう倒したよ」

俺は変身解除した。今回も一件落着つてところだな。

陰道 「つて！いつまで持つてるのよ！」

陰道は俺を殴つて降りた。

ホロスカイザー

身体能力は不明、通常のホロスより強い攻撃力と再生能力、幻を生み出し1部の部位を巨大化、超強力な攻撃が可能になつてゐる、しかし夢のやつの力が切れた為か、もう使えなくなつてゐる。

ヴァイオブレイキンド

変身者不明、見た目は植物に巨大なワニのような口を持つてゐる。触手で獲物を捕らえる他、触手から強力なら酸性液を撒く。

第12話【再起、謎の始まり】

「これで終わりつと」

あの洞窟の一件から数週間が経過した。

洞窟の出来事は想像以上に広まつており、崩落は意図的で何かやばい実験をしていたとか悲鳴は死者の呼び声だとありもしない噂が流れ、学校はその話で賑わっている。

飛「まつたくあんな事があつたのにみんな呑気だなあ」

陰「みんなは知らないんだから当然でしょ」

飛「そうだな」

山「何も知らないってのも大事だと思うぜ?」

陰「そういえば最近は怪人がでてないね」

飛「ああ」

あの洞窟の一件以来、怪人が出なくなつた。出てもすぐ倒せるような雑魚ばかりで、正直つまらない

山「おまえ、強い怪人出てこないかなーって顔してるな」

影「平和なのもいい事だよ」

バレた。

（部室）

陰「今日もホロスの事調べよー！」

飛「お、おー！」

怪人が出ないせいで、最近はホロスの事を調べるぐらいしていいホロスになるのも意外と疲れるし、調べるのも頭を使うから疲れる。

山「あのさ…今日は休みでよくね？」

山内も疲れている、俺が頭を使えない分山内に負担がかかっている為山内はもうヘトヘトだ

陰「なら2人は休んでいいよ、私だけで調べるから」

（検索中）

陰「？ ちょっと2人とも来て」

陰道はしばらくすると俺たちを呼んだ

飛「何かあつたのか？」

山「なんだ…ってこれはこの間のサイトじゃねえか」

陰「そただけど違うの！よく見て！」

前にも見た壁画のような物だった

飛「これがどうかしたのか？」

陰「ちやんとよく見て！ほらこれ！」

よく見ると、2色の紫の体に翠の目を持つライダーの絵が変わつて
いた

山「ホロスに近づいてる？まさかな」

陰「いやいや、これはどう見ても近づいてるよ！」

そんな会話を永遠の続けていたが、俺には聞こえていなかつた
(見た事ないはずなのに見覚えがある…確か…これは…)
すると

『ドカーン！』

遠くの方から爆発音が聞こえてきた
（爆発音のする方へ）

飛「なにがあつたんだ！」

よく見ると、トラックだつたものが勢いよく燃えてる

山「怪人なのか？」

しかし怪人らしき姿は無く、おそらく逃げた後だつた。

飛「一体何が目的だつたんだ…」

とりあえず部室に戻り、ホロスの謎についてまた調べ始めた

飛「さつきまでは怪人出てこないかなとか考えてたけど、いざ出で
くるとやつぱ嫌だな」

山「だろ？ホロスに願いを叶える力もあるのかもな」

飛「冗談でもやめてくれよ…」

そんなくだらない会話をしながら、ホロスについて調べ始めた。

しかし、壁画のようなものしか出てこない
気づけば、下校時間になつていた。

第13話 【転移、謎の……】

第13話 転移、謎の……

「ん？」

部室に戻るとホロスに関する資料などが消えていた。

山「誰かこの部屋に入つたのか？」

陰「鍵かけたし、そんなことはないはずだよ」

しかし部室は荒れていた、本などは何も変化はないが髪やペンなどの軽いものは吹き飛ばれたかのようにいたるところに散らばっている。

飛「誰かがここで扇風機でもつけたか？」

陰「だーかーらー！鍵かけたって！」

だがこの荒れ方は異様だ、だとしたら誰が：を考えていると遠くからまた爆発音がした

山「おいおいたか！」

飛「陰道はここで見守つとけ！俺と山内で行く！」

（爆発した現場）

爆発した現場には特に何も無かつた

山「おいおい、また逃げられたのか？」

飛「逃げられたのか…？こら辺には人もいないし怪人が暴れるような…」

するとすぐ近くの山から爆発が聞こえた。

（？？？の山）

山に入ると妙な雰囲気に包まれた。

飛「何だこの感じ：山内は感じるか？」

振り返るとそこに山内はいなかつた。

飛「!?おい！山内！どこだ！」

山「……い・おい・…ど…だ！」

飛「山内か!?どこにいる!?」

山「なんだか…変…ぞ…！」

俺は妙な雰囲気の正体に気づいた、

飛「くつ…どうやら俺たちは異空間のせいで干渉できないらしい、
山内は山を降りていってくれ！」

山「わかっ…降りて…る」

俺は山を進んだ

飛「…!?これは!」

（遺跡）

山を進むと、そこにはホロスの遺跡に似た遺跡があつた。

飛「なんでこんなのところに…」

すると中から怪人が現れた。

? 「はつはつはつ！まんまと現れたなホロスウ？会いたかつたぜ
？」

飛「こんな事して、何が目的だ！」

? 「そりや、お前と戦いからさ。ちなみに部室を荒らしたのも俺、お
前の資料読んでて楽しかったぜ？」

飛「そうか、そりや良かつたな！そんなに戦いなら戦つてやる！
変身!!」

『アルケミストマッチ!!神話再生!!ホルスバードTheホロス!!!!』

? 「おお！それそれ！でかい腕のやつ！なら、こいつだ！」

すると怪人はホロスの資料と指輪とゲーム機を取り込んだ

なんと怪人に赤いロボットアームと魔法使いのようなロープが生
えた

? 「ジャキーン！デカ腕フォーム！」

ホ「その程度の大きさなら！」

俺は力いっぱいに突撃し、全力の拳を突き出した。しかし、

? 「それだけじゃないぜ？」

怪人の腕は魔法陣により巨大化、自分の大きさの何倍もの大きさの腕で俺を殴ってきた。

ホ 「ぐはあつ!?

？ 「まさかこんなもんじやないよな? ほら! 次!」

ホ 「言われてなくとも!!」

『神話覚醒!! アルケミストマッチ!! UMAワープTheキック!!』

？ 「おおく! 実際見ると派手なピンクしてんね~!」

ホ 「喰らえ!」

俺はワープを繰り返し敵の不意を突いた

？ 「あだつ!? やるじゃないの?」

怪人は白黒のスイッチと何かの紋章を取り込んだ

ホ 「隙まみれだ!」

？ 「それはどうでしょ?」

俺は渾身のキックを食らわせた、はずだつた。なんと相手もワープをし、回避していた。

？ 「どうよ、俺の力は」

ホ 「まだまだ!」

？ 「張り切りすぎだつての!」

怪人は俺よりも素早くワープを繰り返すと紋章が光らせた

ホ 「怯むか!」

『アルケミストファニーツシユ!!』

？ 「俺の方が強いんだよな!」

キックは軽々しく跳ね返された。

ホ 「ぐつ!」

？ 「あと何個あるんだ? そろそろ決着つけようぜ?」

ホ 「ああ、決着をつけようか」

俺は半ば賭けでホロスカイザーに変身した。

『神話超覚醒!! アルケミストマッチ! カイザーTheホロス!!』

？「なに？まさかそれに変身出来るのは…半分は俺のおかげか？」

ホ「そうかもツなあツ!!」

俺は相手がワープするよりも早く蹴りをいれた。

？「うおお…！さすがにそれだと痛いなあ！」

ホ「このまま決着つけさせてもらう!!」

『アルケミストファイニッショ!!!』

俺の一撃は怪人に對して大きなダメージを与えたらしく、怪人は自分が持っていたアイテムをいくつか落としていた。

ホ「なんだこの板みたいなやつ…札？」

俺は「神鳥」と書かれた札のようなものを拾い上げた。

？「まさかここまでダメージを追うとは…一気にケリをつけさせてもらうぜ」

怪人は自分が持っていたアイテムを全て吸収した、怪人はとても禍々しい姿に変わった。

ホ「何度も変わらない！」

？「無駄！」

俺の渾身のパンチは怪人の体に直撃した、しかし怪人は微動だにせず「おいおい、それが本気のパンチか？」といった様子で立っていた。

？「今度はこっちから行かせてもらうぜ？」

怪人は分身し、打撃や魔法等様々な攻撃を加えてきた。

ホ「グツ…!!」

その攻撃はホロスの再生能力を上回つており俺は大ダメージをおつてしまつた。

？「本当はもっと楽しみたいが、時間が経つと回復しちまうからな！トドメをつけさせてもらう！」

ホ「くそ！こうなつたらやけくそだ!!」

俺はさつき拾つた「神鳥」と書かれた札をベルトに装填した。

『神話読取！ サポートバードTheホルスード!!』

その音声が鳴ると、神殿の方から鳥型のメカが飛んできた。

ホ「お…おお？」

？「まさかこんなものがあるなんてな…」

驚きのあまり怪人も俺も固まる、敵か味方かも分からぬしなんで
出てきたかも分からぬ。奇跡と言つていい。

？「とにかく！ケリをつけさせてもらう！くたばれえ！」

ホ「なんの!!」

固まつてゐる間に回復はすんでいた為一撃は耐えられた。

ホ「今度はこつちの番だ！いけ!! ホルスード!!」

ホルスードは強く羽ばたくと、風を刃に変えた斬撃を飛ばした。

？「ヴァッ…！この装甲をも貫く斬撃とは…」

ホ「この勝負！俺の勝ちだ！」

『ホルスード アルケミフィニッシュ!!』

ホルスードは俺と合体し マントは大きな翼に、ロボットアームには爪のようなものが生えた。俺は全ての力をロボットアームに込め、怪人に強力な一撃を加える！

ホ「はあーーー！！！」

大型クロード化したロボットアームは怪人の装甲が脆くなつた部位に入り、怪人は倒れた。

異空間は形を保てなくなり元の森に戻つていた、気づくとホルスードは姿を消していた。

飛「今回は全てが謎だつたな…まあこれは陰道とかにも伝えないと
な！」

俺は部室に戻ろうとした…

番外編【ホルスードとホロス】

これはホロスが帰ってきた後の、とある日の話……

「おらあつ！」

俺は今日も怪人と戦っていた。怪人自体はネツシーとか、前に出たやつばつかだから苦戦はしないけどこれだけ数が多いと疲れる。

あの不思議な日以降、怪人が増えに増えて困っている。二吉さんも最近海外旅行とかで出かけたし、この街にいるライダーは俺一人だ。

ホ「そういえば前に鳥が出てきたな、呼び出してみよ」

『神話読取!! サポートバード The ホルスード!!』

ホ「おお、普通に出てくるんだ」

空の向こうからどこからともなく飛んできたホルスード、あの謎の空間じゃなくても召喚出来るらしい。

ホロ「じゃあ、ホルスード！ 行け！」

ホルスードは動こうとしない。

ホロ「どうした？ ほら！ 行け！」

ホルスードはびくともしない、命令口調がいけない？

ホロ「ホルスード！ 行つてください！」

やつぱりびくともしない、言葉が通じてない？

ホロ「説明書とか…ないのかなあ…」

俺が困っているとホルスードもあわあわ動き、どうすればいいのか困っている。

ホロ「見た目が鳥だからか…かわいいな…」

するとホルスードは照れてるかのよう、顔を隠す。まさか感情を読み取つてる…？

ホロ「うおおお!! あの怪人!! めっちゃ腹立つな!! めっちゃ倒したいな!!」

俺が怒るフリをすると、ホルスードはその怪人を前にも見せた風を斬撃に変えた攻撃をして倒した。

ホロ「おー！ やるじやん！」

ホルスードは誇らしげに翼を広げていた。

『バアアアアアン!!!』

ホルスードと遊んでいると、湖の方で爆発が聞こえた。

「湖」

俺たちは湖に行くと、そこには嫌な思い出がいた。

ホロ「…ヴァイオブレイキンド…!!」

ヴァイオブレイキンド…サナに怪我を負わせ、ホロスを暴走させた俺からしたらトラウマでしかない怪人…いや怪獣だ…前よりもより植物らしい姿のそいつは俺を見つけるなり襲いかかってきた。

ヴ「ウ”オオオオオオアアアアアア”!!」

ホロ「くつ！」

ヴァイオブレイキンドは強い酸性の液体を飛ばしてきた、こいつはホロスの再生能力をも上回る、非常に厄介だ。しかもブレイキンドは湖のど真ん中にいて攻撃が届かない、一体どうすれば…
するとホルスードが俺を頼ってくれー!と言わんばかりにこつちを見てきた。

ホロ「お前なら行けるのか?」

ホル「キイイイイイヤア！」

ホルスードは答えると、ベルトのレバーを回せとそう言つてるような気がした。

『アルケミフィニッショ!!』

ホルスードは俺の後方に回るとその翼で包むような体勢になつた。するとそれは金色の羽に包まれ、俺に装着されていく。

俺の肩からはホルスードの脚。胴体には頭、頭部と背中にはまるで羽飾りの様に翼が現れた。

ホロ「おお!これならあいつにまで届きそうだな」

ホル「キイイイア!」

ホロ「うおつ!? 嘴れるんだ…」

俺は翼を広げ、接近戦を仕掛けた。

ホロ「この距離なら！」

ロボットアームをぐわつ！と開くと怪獣の触手を根こそぎ取つて
いつた。

ホロ「これでお前はもう何も出来ない、だろ？」

何も出来なくなり暴れる怪獣はじたばたと街の方へ降りていこう
とした。

ホロ「そうはさせてねえよ！」

『ホルスード！アルケミストファニッショ!!』

ホルスードの脚から放たれる火炎放射のようなビームは怪獣に直
撃、爆発した。

ホロ「一件落着……」

俺は変身解除するとホルスードは空の彼方へ飛び立った。

械「ありがとうなー！」

俺はホルスードにお礼を言うと部室へ戻った

第14話【転移、もう1人の神がいる世界】

「部室に戻るか」

俺は怪人を倒し、部室に戻ろうとする。そういえばあの怪人、俺と戦うのを楽しんでいたようだ。

どうでもいい事を考えながら山を下りると見知らぬ場所に出ていた。

械「あれ？ 山の反対側から下りたのかな」

俺は山に引き返し、元来た道を戻ろうとするとつまづき、落下してしまった。

械「いてて……人もいないしホロスにでもなればよかつたな……結構落ちたみたいだし……ん？ あれは……」

するとそこには洞穴があつた。何かに導かれたような気がして洞穴に入るとそこには

械「なんだこれ、古代の何かか？」

明らかに最近のものではない何かがあり、その中にはボトルもあつた。

械「お、これもホロスのボトルなのかな？」

触れた瞬間に何かに弾き飛ばされた。神々しいが、ホロスとは違う力に。

械「いて……これ以上探索するのは止しておくか、ボトルは……まあ戻したらまた弾き飛ばされそうだしいいか」

俺は洞穴を出て山を下りた。

「街」

山をおりると、そこには知らない街があつた。絶対にこの方向であつてるはずなのに。

械「どこだここ……？」

俺は通りすがりの黒いコートを着た人に「ここがどこかを聞こうと

すると…

? 「ここはもう1人の神がいる街だよ、ホロス」

械「!?

俺は直感でこいつはヤバいと思い、変身しようとしたが

? 「ここは人が多いよ? バレたら君だつて不味いんじゃないか?」

械「ああ、その通りだな…」

? 「敵意むき出しあはやめてほしいな、せつかく色々教えてあげようとしたのに」

械「なら、教えてもらおうか」

? 「場所を変えよう」

俺はラーメン屋へ連れていかれた。

（ラーメン屋）

械「で、何を教えてくれるんだよ」

? 「まず自己紹介しよう、僕は楽。神を屠る者の片割れさ。」

械「俺は飛滅 械都、お前の言う通り仮面ライダーホロスだ」

楽「ふうん、意外と素直なんだ」

械「うるさい! はやく教えろ!」

楽「じやあ…」

楽と名乗る奴は俺の金でラーメンを食べ始めた、今月はサナと遊びに行こうとしてたのに…!

楽「それで、何を知りたい?」

械「そりや…なんで俺は知らない街にいるのか、ともう1人の神についてだな」

楽「まず君がこの街…いやこの世界にやつてきたのは僕のせいさ」

械「なつ…まあそれは分かったことにしておく、ところで”この世界”ってどういうことだ?」

楽「君が転移してからさ、最初は僕たちも驚いた! だつてこんな事になるなんて思つてみなかつたからね!」

械「何楽しそうにしてんだよ! 山内とかはどうなつたんだ!」

樂「彼らは自分たちの…ホロスの世界にいるよ、今頃君を探してるだろうね」

械「くつ…！どうやつたら帰れるんだ」

樂「さあ？」

械「さあ ってなんだよ！ちゃんと教え…」

樂は突然席を立ち上がり帰ろうとする。

おれは樂を追いかけた。

械「おい！まだ話は…」

樂「2つ目の質問、もう1人の神がいるって言うのはこいつの事だよ」

樂が指さす方向には1人の男がいた。

械「この男がどうしたん…」

振り返ると樂の姿は無かつた。

械「ちつ…もつと色々聞きたかったな」

俺はこの場から離れようとするとそいつに止められた。

男「今、誰と話してたんじや？」

械「え…」

若い男の容姿からは到底想像できないトーンで話してきた。

械「あの…今話してたのは、樂つて人で…」

男「やはり樂か…お主も奴らの仲間ならば問答無用！」

男はベルトと矛盾と書かれた札のようなものを取り出した

「変身！」

「核、読み取り」「矛盾する運命…ワード、矛盾！」

男は紫に光り、変身した。

その姿は紫の体に翡翠の目、大きな盾に槍を持っており、部室で見たライダーと同じだった。

械「おまえは…」

紫のライダーは俺目掛けて矛を突いてきた。

械「話を聞け!! 変身!!」

『アルケミストマッチ!!』

なんとかホロスに変身出来たが槍を止めることは出来ず大きく吹き飛ばされてしまった。

紫「その姿…貴様何者じゃ？」

ようやく話を聞いてくれそうだ

械「おれは飛滅 械都…いや、仮面ライダーホロスだ」
俺は紫のライダーに事情を説明した。

紫のライダーは【仮面ライダーワード】と言うらしい、そしてそれに変身しているのが【塾屋 ゴン】、常磐高校に通う高校2年生だと。そして俺に問答無用で攻撃してきたのが【言操神ワード】、言葉の神様みたいだ。

ゴン「さつきはごめん！ワードが話を聞かなくてさ」

械「全然いいよ、悪いやつと話してたんだから誤解もされる」
俺たちは色々と話ながら常磐高校に向かつた。

（常磐高校）

械「当たり前のように入つたが大丈夫なのか？」

ゴン「はは…大丈夫だと思うよ」

そんな頼りない返答が返つてくるとこつとも不安になる。
すると目の前に女の子が飛び出してきた。

? 「ちよつと！ゴン!? 一体どこに…」

女の子はゴンに怒鳴ろうとしたが、俺の存在に気づいて少し怪しみながらゴンを呼ぶ。

? 「（ちよつと…この人誰なの…!）」

ゴン「（この人は械都さん、悪い人ではないよ）」

? 「（ゴンが言うなら…）」

そんな仲睦まじい会話が聞こえてくる、いいね青春って感じで。

? 「どうも初めまして、私は【平方 言葉】です」

械「俺は械都だ、よろしく！」

挨拶をすませると俺はゴンに聞いた。

械「(こ)の子とゴンはその…付き合つてゐるのか?」

ゴン「そんなこと…!」

平「そんなことないわよ!!」

言葉さんは強く否定した。

械「あ、ああ それはすまなかつた」

あらかた話を済ませると俺は2人に案内されて街を観光することになった。

（街）

街ではクレープ屋さんや楽と食べたラーメン屋等、様々な場所を観光した。

そのうち日が暮れた。

ゴン「じやあ今日はこの辺で」

械「ああ、街の紹介ありがとうな」

ゴン「いえいえ、では俺たちは…なんだつて！」

ゴンが声を荒らげた時、街で轟音が響いた。

ゴン「言葉は先に帰つて!!」

俺たちは轟音の方へ向かつた。

（現場）

轟音が鳴つた場所には2体の怪人がいた。一体は俺が森で倒したはずの怪人、もう一体は…ブレイキンド!

樂「ブレイキンドは感知出来なかつたかな?ワード」
上を見上げるとそこには樂がいた。

ワード「何が目的じや！」

ゴンとワードが入れ替わる。

樂「まあ、君たちの戦いを見て”樂” しもうかなつてね」

械「ほお、言つてくれるじやねえか」

械・ゴン『変身!!』

「核、読み取り」「矛盾する運命…ワード、矛盾！」

『アルケミストマッチ!!神話再生!!ホルスバードTheホロス!!』

怪「会いたかったぜえ？ ホロスう？」

倒したはずの怪人はまるで会う前かのようにぴんぴんしていた。
樂「その怪人は僕が作った怪人だから、たっぷり相手してあげてほしいな！」

ホ「そういうことらしい、ゴ…ワードはブレイキンドを頼む」
ワード「了解じや」

ホ「俺はこいつを1回倒してるからな！速攻行かせてもらう!!」
『神話読取！サポートバードTheホルスード…』

ホロ「来い!!! ホルスード!!!」

ホルスードは俺に呼応してはるか彼方からやつてくる。

ホロ「一撃に全てをかける!!」

俺はレバーを回し必殺技を放つ！

『アルケミフィニッシュユ!!』

ホルスードはロボットアームと合体、巨大な金の拳になり怪人を碎く。

怪「ぐおおおおおお!!!」

怪人は敗れ、爆発する。

するとブレイキンドが近づいてきた。

ホロ「なつ!?」

俺はそのままはね飛ばれる。

ワード「すまない、防戦一方だつた怪人が突如お主の方に走り出したんでな、対応できんかった。」

ブレイキンドは怪人の残留思念と融合、そして姿を変えた。
樂「これだよこれ！こういうのが見たかつたんだよ！名付けるなら…ハツピーブレイキンド？」

ワード「怪人が幸せを謳うか！」

ワードは強力なひと突きをお見舞した。怪人は確かに喰らつてい

たがびくともしない。

ワード「こうなつたら同時に必殺技じや、出来るな？ホロス」

ホロ「任せな！」

「必殺書き込み！」「パラドシカルキック！」

『BreakKICK！アルケミストファニッシュ!!』

2人の同時のキックが決まつたが怪人はやはりびくともしなかつた。

ハ「今度はこつちがいくぜ？」

そう言うと怪人はライダー キックを真似て蹴りを入れてきた。

ホロ「所詮はパクリ！この程度！」

ワード「不容易に近づくでない！」

俺はロボットアームを突き出したが、

ハ「舐めてるから痛い目を見る!!」

ホロ「なにつ…？」

ロボットアームにはヒビが入り、粉々になつてしまつた。

ホロ「ぐうつ…!!」

ハ「チャンス！」

怪人はもう一度キックを繰り出してきた。

ワード「そやはさせん！」

ワードは自身の腕に備えている大きな盾を突き出す。

ハ「その程度!!」

盾は碎かれてしまう。

ワード「仕方あるまい…あまりこういうことはしたくなかったが。おぬし、盗つたボトルがあるじやろ、貸してみろ」

ワードにボトルを渡すとボトルの石化は解かれ、紫色のボトルが生成された。

ワード「これを使え！」

ホロ「ありがとうございます…！そいいえば、これ使えるんじやないですか？」

俺は神鳥と書かれた札を取り出す

ハ「作戦会議は終わりか?」

ホロ「ああ終わりだ、今度こそ決着をつけてやる!!」

『アルケミストマッチ!伝説覚醒!ライダーワードThe 矛盾!!』

「核、読み取り」「覚醒する神話鳥…ワード、神鳥!」

ホロスの体は紫に変化、翡翠の目になりロボットアームは槍と盾の機能が合わさった複合武装に変わった。

ワードはホルスードに包まれ姿を変える。背中には翼が生え目はオレンジに、体は金やオレンジ色になり武装はロボットアームを模したハンマーになった。

ワード「一気に決めるぞ!ホロス!」

ホロ「ああ!」

「必殺書き込み!」「ゴッドバードハンマー!」

『Break Spear!アルケミストファイニッショ!!』

ホロ・ワード「はー!!」

ハ「ぐわああああ!!!」

怪人は爆発し、今度こそ消えた。

すると時空が歪み始めた。

ゴン「お別れのようだね」

械「そうだな、今日は色々あつたが楽しかった、貴重な経験だからなんだから楽しかったよ、ありがとう!」

そうして時空の歪みは收まり、気づくと自分の世界に帰っていた。

俺は自宅へ戻った。

第15話【巨大、迫りくる悪】

「なんだこれ!?」

俺達はいつもの様に部活をしていた。するととあるニュースに辿り着いた。

陰 「巨大生物出現だつて！」

山 「あれはやばかつたな……」ことは遠いがいつ来るか分からぬないな

⋮

陰 「けど一度は見てみたくない!?」

山 「それは危ないだろ」

そんな山内と陰道の言い争いが聞こえる。当たり前の日常だ、けどこういうのは久しぶりな気がする。平和が一番だ。俺は2人の言い争いを聞きながら眠りについた。

そして今日も特に進展なく部活は終わつた。

(翌日)

械 「ようやくこの日がやつてきた！」

今日は待ちに待つたサナとのデートの日だ。俺は待ち合わせに向かう途中、コンビニに寄つた。

「おいおい…先週の巨大生物やばかつたらしいな…」

「ああ…初めて出た時は違う種類だつたらしいしな…」

そんな会話が聞こえてきた。

械（先週か…確かに先週なら俺が知らないわけだ）

そう、先週は別の世界に飛ばされていた。そうか…こういうことになるのか…。

械 「やば！もうこんな時間かよ！」

巨大生物の話を聞いていると遅刻しそうになつていた。

陰 「おそいよー！」

械 「あはは…ごめん」

陰「もう…」

俺は軽く謝罪をすませるとサナは俺の手を引っ張り街中へ連れていった。

（街中）

俺たちは街中をうろついていた。すると：

「ドシャアアア!!!!」

何かが崩れた音がした。

械「あつちだ！」

音がなつた方へ行くとビルが崩れており、そこにはネツシーとかとは比べ物にならないほど大きい化け物がいた。

械「なんてデカさだ…」

少し恐れてしまつたが、目を覚まし俺は急いでホロスに変身しようとした。

陰「だめ!!」

械「は!?」

こんな時に何を言つてるんだ、思わずそう言おうとしたがぐつと堪えた。

械「どうして…」

陰「またどつか行くのは嫌…」

械「けど…」

陰「…」

械「…分かつた、どつちにしろあの大きさは太刀打ち出来ないしな

…」

俺は渋々陰道の言うことを聞い入れ、避難した。

その巨大生物…怪人は人を追いかけるように向かってきた。

械（こうやつて普通に逃げたりするのなんてなんか久しぶりだな…あれに踏み潰されたらさすかにホロスの再生能力でも耐えられない

だろう…)

そんなどうでもいい事を考えていると、つまづいてしまった。

陰 「大丈夫!？」

械 「大丈夫…はやく逃げないとな」

しかし、必死に逃げていたがいつしか追いつかれそうになつてい
た。

械 （このままでは怪人に押しつぶされてしまう…どうすれば…）
すると建物の方から声がした。

? 「お前ら！こっちだ！」

♪ビルの中♪

間一髪ビルに入ると、そこには同様に逃げ遅れた人たちがいた。

? 「お前ら、危なかつたな」

械 「あなたは…？」

? 「俺か？俺は【誠屋 東野（まことや とうや】だ、今はま
だ売れてない：記者だ】

械 「俺は械都、飛滅 械都です。でこっちが…」

誠 「知ってる、お前たちのことはどうの昔にな。」

俺たち、そんな有名だったか？と陰道と顔を合わせ疑問に思う。

誠 「まあそんなことはどうでもいい、怪人が見やすい上へ行こう」
そう言われ着いていくと誠屋さんはたくさんの写真を撮り始めた。

誠 「こりやスクープだな、昇進間違いなしだ」

誠屋さんは怪人にカメラを向け独り言を言つてはいる。しかしどこ
か気が抜けてるな…

械 「俺たちこの後どうなるんですかね？」

誠 「俺が知るか、それよりここももう危なそうだぞ
怪物は手を振りあげていてとても避けられそうにない。」

械 「まずつ!？」

誠 「仕方ない…」

誠屋さんはそういうと俺とサナを突き飛ばした。そのおかげで俺

たちは怪物からの攻撃を喰らわずに済んだ。

陰 「あの人平気なのかな…」

械「わかんない…けど今は俺のやるべきことをやる！サナはここにいてくれ」

陰「わかつた…氣をつけてね」

俺はベルトとナックルを懐から取り出した。

『アルケミストマッチ！UMAキック!!』

ホ「団体が大きい分素早い動きはできないだろ！」

俺はUMAキックに変身しワープとキックを繰り返す一撃離脱の攻撃を繰り返した。

最初は振り払おうとしていた怪物だったが次第に動きが鈍くなる。

ホ「これでトドメだ！はあつ！」

すると相手は咄嗟に小さくなり攻撃を躱す。

ホ「まだそんなことする余裕があつたなんてな、けど小さくなつたところで！」

しかし振り返るとそこにはまったく別の姿をした怪人がいた。

ホ「なに!?姿を変えられるつていうのかよ!?だがそんなしょぼい見

た目なら余裕で…」

怪「余裕だと…？」

すると相手はどこからか剣を取り出した。

『狂悪剣裂狂！』

怪「これならどうだ？」

その怪人はこちらと同じような方法でワープと攻撃を繰り返す。しかし相手の方が断然早かつた。

ホ「くつ…このままでは劣勢か…！」

俺は咄嗟にボトルを変えホルスードを呼ぶ。

ホ「来い!!ホルスード!!」

ホルスードは上空からものすごい勢いで突つ込んでくると的確に相手の剣を狙う。そして相手の剣を碎いた。

怪「なにつ、初めて見るな…！」

ホ「このまま一気に！」

怪「そうはさせるか！」

今度は青い銃を取り出す。そして怪人は青一色になり1本角になる。その姿はまるで仮面ライダーのようだつた。

ホ「怪人が仮面ライダーの真似事とは…！」

怪「流行りには乗つた方がいいぜ？」

怪人は引き金を構えると銃を乱射する。

ホ「その程度の弾幕！ ホロスなら！」

俺は一気に距離を詰め、ロボットアームを突き出した。

怪「油断しすぎなんだよ！」

俺は一気に距離を詰め、ロボットアームを突き出した。

怪「油断しすぎなんだよ！」

俺は一気に距離を詰め、ロボットアームを突き出した。

怪「油断しすぎなんだよ！」

ホ「その程度なんとも！」

しかし煙の先にはサナがいた。

ホ「なに…!? ホルスード!!!」

避けきれない俺はホルスードに攻撃してもらいなんとか避けられたが咄嗟の出来事だつた為ホルスードの攻撃は強く、ロボットアームは破損してしまつた。

サナ「きやーこわーい、なーんて」

サナは容姿を変える、それは怪人が化けた姿だつた。

ホ「てめえ…!! よくも…!!」

その時、ホロスの瞳が黒く染る。ホロスの姿はカイザーと似た姿になるがまつたく別のものだつた。

誠「……良くない流れだ、あの女にとやかく言われたくは無いが

……！」

誠屋が止めに入ろうとすると突如空が光る。そこには1人のライダーがいた。

？「また暴走か…神話の力を人に貸すのははやかつたか？」

ホロスはライダーの方を向く。そして襲い掛かるが

？「完全に覚醒したお前ならまだしも…そんな中途半端な姿のお前に負けるほど俺も弱くはなつてない。」

そういうとそのライダーは小型の太陽に近いものを生み出すとホロスに当たた。直撃したホロスはもがき変身を解いた。

誠「また大スクープだな」

誠屋がカメラを向けるとそのライダーは誠屋の方を向く。

？「お前：この世界の者じやないな、何しに来た？」

誠「まあ色々あつて寄り道してるんだ、見逃してくれ」

？「進化の邪魔をしないなら好きにしろ」

誠「ありがたいな」

そしてライダーは天に帰つていった。

第16話【悟り、決心の刻】

「大丈夫!？」

俺はいつの間にか横になつており、目の前にはサナがいた。

械 「俺どうなつたんだ…？」

陰 「怪人が私のフリをして…そしたらホロスが黒くなつて…」
思い出した。俺はあの怪人に…あんなことをするなんて許せない、
絶対に復讐してやると決意を固めようとした時。

誠 「お前、復讐しようなんて考えてないよな」

械 「なつ…そんなこと…」

誠 「俺には分かる、そしてアイツに心を奪われた姿もな」
こいつの言つてることが分からなかつた。けどどこか癪に障る。
械 「とにかく、あの怪人は放つておけないだろ！俺はあの怪人を探
す！行こう、サナ！」

陰 「ちよつ…」

俺たちは急いでビルから降りた。

誠 「はあ…アレにならない為にも怪人を倒してやりたいが、アイツ
に止められてるんだよな…なあ、ラーサン？」

（街中）

俺たちは混乱する人混みの中を強引に突つきる。

陰 「ちよつと…ちよつと待つてつてば！」

械 「…なんだよ」

陰 「さつきから何そんなに怒つてるの？そんなのいつもの械都らし
くないよ」

械 「こっちにも色々事情つてもんがあるんだよ」

陰 「けど私たち同じ部活の仲なんだよ？ちよつとぐらい…」

械 「無理なもん無理なんだよ!!」

つい言いすぎてしまつた。俺は謝ろうとするが

陰「わかったよ…そんなに話せないならもういいよ！」

そういうとサナはどこかへ行ってしまった。

械「サナ…」

誠「やつちやつたな」

械「ああ…ってうわ！なんでここにいるんだよ！」

誠「そりやあとつけて来たからな、それより謝りに行かなくていいのか？」

械「そうだ、俺は謝らなくちゃいけないんだ」

俺は急いでサナの後を追った。

誠「これで回避出来たらいいんだがな」

（街中）

械「おーい！どこだ！サナー!!」

後を追つたが見失つてしまつた。おれは必死にサナを探す。そん

な時

「ドオオオオオーン!!」

近くで爆発音がした。そこには最初に現れた怪物とはまた違つた、キメラのような怪物がいた。

「見つけたぞ仮面ライダー!!しねええ!!」

そういうとキメラもどきは光線を放つ。危機一髪で躲し変身しようとするが。

械「ここじや不利すぎる…」

周りのビルは壊されていて同じ目線に立つことも出来ず、さつきのような戦い方は見切られているため出来ない。

械「ここは逃げるしかないか…！」

俺は来た道を戻るよう逃げた、そして避難用の大型船に乗り込んだ。

（船）

どうやら怪物は撒けたようだ。はやくサナに会わないと…。
そんな中、目の前にサナらしき人物がいた。

械「あつ！サナ！」

陰「…なに」

械「あのさ、さつきは本当にごめ…」

俺はサナに謝罪しようとすると船は大きく揺れた。

サナ「なに!?」

械「まさか…!!」

（甲板）

海面から黒く重々しい巨影が姿を表す。

「キシャアアアアアアア!!!」

キメラもどきは咆哮をあげこちらを睨む。

ホ「くつ…ここまで追つてくるなんてな」

俺はベルトを取りだし変身した。

『アルケミストマッチ!』

そいつは爪により斬り裂く攻撃をしかけてきた。

ホ「その程度なら！」

俺はその攻撃を躊躇しカウンターをしようとロボットアームを構える。

するとその時、船は大きく揺れた。

ホ「なに!?」

咄嗟の出来事に反応出来ずよろけてしまい、その攻撃をもろに喰らってしまう。

ホ「うぐあつ…！」

俺は甲板に膝をつく。そこにはこちらを狙い光線を撃とうとするキメラもどきの姿があつた。

ホ「まずつ…!?」

しかし光線は飛んでこなかつた。顔を上げるとそこには見たことないライダーが俺を守つてゐる。

ホ「誰だ…？」

？「そいつに話しかけても無駄だ、人形みたいな物だからな」後ろを向くとそこには誠屋がいた。

ホ「あんた…何者なんだ…？」

誠「行きずりの仮面ライダーだ、覚えなくて良い」

そういうと記者は懐からカードとタブレットのようなものを取りだし腰に巻いた。

『FINAL KAMEN RIDE DE—RAISE』

そのような音声とともに5枚の板が誠屋の周りを囲いその姿をライダーのものへ変えてゆく。

今度は黒い部分が広がりアーマーが変わる。胴体アーマーには変身に使つていたカードが10枚ほど並び、そこにはライダーの顔が書かれていた。

そうしてデレイズ?は変身を遂げた。

ディ「『デレイズじゃないデイレイズだ、覚えるならちゃんと覚える』こいつも心読めるのか…!?

ディ「はあ…まあいい、とにかくこいつは俺が引き受ける。あとは自分でなんとかしろ」

そういうとデイレイズはタブレットを押した。

『KAMEN RIDE SSS』

音声が流れると隣にはモスグリーンと青緑のライダーがどこからともなく現れる。

ホ「え…? 今どこから出てきた…!?

俺が呆気にとられてる時もデイレイズは容赦なく進める。

『NA—NA—NA—NAKIE—NO』

ディレイズとツートンのライダーは動きを完全に合わせ銃を敵に向ける。

ディ「これで終わりだ…!」

2人から放たれた弾はキメラもどきにクリーンヒット、巨影の姿を

解く。

怪「くつそおおおお!!!」

デイ「デカブツは倒した、俺はそこら辺で見てるとしよう

怪「さつきからなんなんだ！空からライダーが出てきたり他のライダーが出てくるなんて！」

正直同情する。

怪「こうなつたら逃げるが勝ちだ！」

ホ「今度は逃がさない！来い！ホルスード!!」

俺はホルスードを利用した加速で怪人を捕らえる。

怪「こうなつたら、変身！」

怪人は衝撃波を放ち、俺はおもわず手を離してしまった。

『トスマケルア マッチ！』

怪人は姿を変えていく。右腕には俺のと似たロボットアームが、姿はホロスそつくりになつていく。しかし色は鮮やかなものではなく黒い姿だつた。

怪「仮面ライダーホロス！変身完了！」

ホ「怪人が神話を名乗るとは…しかし所詮は偽物！一瞬で倒してやる」

怪「姿は偽物でも力はどうかな？」

偽ホロスはすごい勢いで接近してくる。俺はホルスードを使い避けようとするが。

怪「遅いんだよ！」

怪人の速さはものすごく、回避する前に追いつかれてしまつた。

怪「ロボットアームの痛さ、知つてみろ！」

偽ホロスのロボットアームは俺の胸に直撃した。

ホ「ぐつ…！まだまだ！」

すごい激痛が走るが俺はそれを耐え反撃に出る。

ホ「姿は似ても能力までは真似出来ないだろ！」
俺はロボットアームを全力で振りかざす。

怪「ぐはつ！」

ホ「やつぱり回復能力までは真似出来なかつたみたいだな、このまま一気に！」

俺は力を込めた蹴りを偽ホロスの左腕に喰らわす。

偽ホロスのロボットアームは碎け散つた。

怪「くそつ…ならこうだ」

『狂悪剣裂狂！』

偽ホロスの左腕は剣と一体になつたものになつた。

ホ「その形どこかで…」

怪「なにをボーツとしている！」

偽ホロスは剣を振りかざす。俺は咄嗟に左腕でガードする。

怪「弱い！」

ロボットアームは斬られ、どこかへ飛ばされてしまつた。

ホ「ぐつ…！」

怪「まだまだあ！」

偽ホロスは剣を連続で振るう。装甲はどんどん無くなつていき劣勢になつていつた。

怪「これでトドメだ！」

偽ホロスは空高く上がり蹴りをいれようとする。

ホ「俺は…」

怪「しねえええ！」

ホ「俺はサナに謝らないといけないんだ！」

怪人の蹴りが直撃する。だが俺には効かなかつた。

『ホロスカイザー！』

どこからかマントが飛んでくる。俺はそれに包まれるとホロスカイザーに姿を変えた。

ホ「一気に決める！」

ホルスードが俺と合わさる。マントは翼のように大きく広がり天へ舞う。

ホ「喰らえええ！」

怪「ぐわあああ！！」

怪人は爆散した。

ディ「やつと終わつたか、だいぶかかつたんじやないか？」

ホ「お前が手伝つてくれればもつとはやく…」

ディ「まあ、 そなうだろうな」

ホ「だつたらなんで！」

ディ「俺は進化を促す者じやない、 それにそなうに人に頼つてばつかでこの世界を守れるのか？」

ホ「なつ…」

ディ「あの程度なら一人で倒せ、 恋とやらが足枷になるのなら付き合いなんてのはやめておけ」

ホ「さつきから勝手なことを！」

ディ「全て事実だ、 女が守れなかつたからと世界を棄てた奴を二人程知つてる」

ホ「確かに…」

ディ「それにお前の進化を俺は楽しみに…いや、 なんでもない。今は忘れろ」

ディ「まあいい、 とにかくもつと力をつけることだな。 そうじやないとお前はセパ…黒く焦げるぞ」

ホ「さつきから何わけのわからぬことを…」

ディ「まあ良い。 言いたいことは言つた…俺は行くべき場所に行かせてもらう。 またどこかで会うかもな。」

そういうとディレイズは膜の中に消えた。

械「あの、 サナ…」

陰「なに？」

械「さつきは本当にごめん！俺、 言いすぎた！」

陰「はあ…いいよ、 今回は特別だからね！」

械「おう！」

俺たちはデートを再開した。

第17話【突入、ブレイキンド殲滅作戦】

「坊主！早く来てくれ！」

朝早くから二吉さんに呼び出された急いで向かおうとする。

械「来てくれってどこにだよ……」

来てくれとしか言われてない俺たちは学校を飛び出すもすぐ止まってしまった。

陰「んー、初めて会ったあの対怪人施設の……」

山「SRH？」

陰「あーそれそれ！そこじやない？」

械「とりあえずそこに向かうか、久しぶりのこいつで！」

俺は腰についているボトルホルダーから他より一回り大きいボトルを空に投げる。

『ドライブイングワインガーハー！』

山「バイクに3人乗りする気か？」

械「あー……」

山「変身すればいいんじゃないかな？」

械「はあ：分かったよ、先行つてくれ。」

山内とサナはバイクでSRHに向かう。

『アルケミストマッチ！』

その後を俺は必死に追いかけた。

（SRH）

械「はあ：はあ……」

山「流石にライダーになつてもキツいのか？」

械「そりや…なあ…」

俺たちが話をしていると入口から二吉さんが現れる。

二「よくここつて分かつたなく、とりあえず中入ってくれ」

そんな雑な…と思うが心にとどめることにした。

二吉さんについて行くとそこには会議室があり、中には武装をした人達がいた。二吉さんの目の色が変わる。

二「ここに集まつてもらつたのは他ならない。早速本題に入るが、敵の本拠地が分かつた。」

3人「え!？」

俺たちは驚きのあまり声を出した、だが周りは微動だにしない。

二「入り方も分かつて。今から行くぞ」

あまりの展開の早さに驚きを隠せない。もうすこし事前に言つてほしかつた。

二「山内くん?と彼女さんはここで待つててもらうがいいか?」

械「連れていかないんですか?」

二「彼らを危険に晒すつもりか?それでもいいなら連れて行つてもいいが」

械「確かに…じゃあ待つててもらいます」

二「わかった」

2人にはSRHで待つててもらうことにした。

（遺跡跡地）

械「ここつて…」

二「ああ、お前が植物の化け物と戦つた場所だ。どうした?怖気付いたのか?」

械「いや、そんなことはないですけど…どうしてここなのかなつていたのか?」

二「分からぬ。俺たちの考えではブレイキンドの出現場所が関わつてゐるんじゃないかと思うんだ。まあこの話はまた今度でもいいだろう。」

少し気になるが、今は戦いに集中することにした。

二「作戦を再度…坊主には初めてか…まあいい、作戦を教える」
二吉さんの言つてた作戦は俺たちライダーが先陣を切りその後から隊員さんたちが雑魚を殲滅するというものだつた。

二「じゃあ入るぞ、変身！」

械「変身！」

『調整!!メカニクスマツチ!!Y o u a r e f i g h t? 溶岩パンチング!

仮面ライダー！ クリムゾン!!!』

『アルケミストマツチ!!神話再生!!!ホルスバードTheホロス!!!!』

俺たちは敵の本拠地、空間の裂け目のようなところに入る。

中に入るとそこには古い暮らしが行われていた。

畑や藁で作られた家など：歴史の教科書で見たような感じだつた。

ク「…なんか間違えたか？」

流石のクリムゾンや隊員さん達も困惑する。

しかしここがブレイキンドの住処であることがすぐ分かつた。

農作業をしていたのがブレイキンドだからだ。

ホ「なんかめちゃシユールだな…」

呆気にとられているとそのブレイキンドを襲うようにほかのブレイキンドが現れ攻撃する。どうやらブレイキンド同士は特に仲間とかではないようだ。

ク「ま、まあいい！俺たちは先に行くぞ！お前ら！こちらの制圧は頼む！」

俺たちは奥へ進んだ。

村を抜けるとそこには禍々しい雰囲気に包まれた空間があつた。

ホ「ようやく敵の本拠地っぽくなつてきましたね」

ク「ああ、…つどうやらあれがここボスみたいだな」

怪「よく来たなお前たち、歓迎しようじやないか」

ク「怪人の歓迎なんて受けたくねえな！」

クリムゾンは怪人の方へ突っ込む。それに合わせ俺も走った。

怪「品がないな…せつかく招き入れたというのに」

クリムゾンはマグマのように活性化したパンチを繰り出す。しかし怪人はそれを難なく避けどこに隠し持っていたか、ショットガンでクリムゾンを撃つ。

ク「ぐあつ！」

クリムゾンは大きく後ろへ飛ばされた。

怪「安心しろ、こいつには殺傷能力はない。ゴム弾みたいなものだ」

ク「ずいぶん舐めたことしてくれるじゃねえか…！」

怪「舐めてはいない、こちらは話をしたいのだ」

ク「一応聞いてやる」

怪「ホロスの力をくれないか？」

ホ「なんのためにだ！」

怪「この世界に残つてゐる唯一と言つていい神の力だ。それがあれば世界をひっくり返す…人の世と我々の世界を逆にすることだつて出来る。」

ク「そんなことさせよ！」

怪「交渉決裂か…まあいい、バカと話すのはいい暇つぶしになるからな。しかしあのパンチは痛い…ルールを変えよう。」

今度はメガホンのようなものを取り出す。

『パンチ禁止！』

町内放送のように響くその声は村まで届く。

ク「怪人に言われてやめるかつて！」

クリムゾンはパンチを繰り出そうとする。しかしまグマは活性化せずパンチも普通のものだつた。

ク「なつ…なにしやがつた！」

怪「ルールを変えただけだ」

ホ「なら！」

俺はロボットアームを開き怪人を掴む。

怪「ぐつ…確かにパンチではないな…しかしその程度の力！」

怪人はなんなく押し返し反撃の蹴りを入れる。俺は後ろに吹き飛

ばされてしまった。

ク「おい！大丈夫か！」

ホ「大丈夫です！それより怪人を！」

ク「ああ！合わせろ、ホロス！」

俺は立ち上がりクリムゾンに並ぶ。クリムゾンはベルトにフブキのボトルを刺し、俺はUMAキックのボトルをはめる。

『UMAキック！』

『調整！メカニクスマッチ！You are fight？冰雪キック！』

『仮面ライダー！ フブキ！』

クリムゾンは全身を青に変え、装飾が腕から足へ移動する。マグマのように煮えたぎつてた全身のラインは凍り、足は氷山のように大きくなつっていた。

フ「ダブルキックだ！出来るな！」

ホ「はい！ちよつと前にもやつたので多分！」

フ「ちよつと前…？まあいい、いくぞ！」

俺たちは必殺技を発動する。

『アルケミストファイニッショ！』

『フブキ！ブリザードキック！』

ダブルライダーを食らった怪人は爆発する。しかし爆煙の中には怪人の姿があつた。

怪「ぐつ…悔つていたぞ人間…もう容赦せん！」

怪人はまたルールを変えた。

『人間の侵入禁止！今いる者は全員追い出せ！』

そう言うとフブキは大きく吹き飛ばされ、追い出されてしまつた。

おそらく隊員たちも。

械「…なんでまだここにいる？まさか…くく、おもしろいな！し

かし今はそこまで余裕はない。」

『仮面ライダー禁止！・追い出せ！』

ホ「うおつ……！」

急に後ろに吹き飛ばされ現世に戻された。
そして扉は閉ざされた。

（遺跡跡地）

二「くつ…厄介なやろうだ。これじゃ手の打ちようがないぞ」

隊A「二吉さん、少し見せたいものが」

二「なんだ？」

隊A「村を襲つてたブレイキンドを倒したらお礼にとブレイキンド
が」

そう言つて見せてきたのはボトルだった。

二「敵の本拠地のくせに、ずいぶん優しいやつがいたもんだな。まあいい、貰えるものはもらつとこう」

俺たちは撤退した。

（S R H）

山「どうだつた？！」

二「今回は失敗だ。無駄な時間を使わせてしまつたな、申し訳ない。」

二吉さんは2人に謝ると俺の方へボトルを投げる。

二「これは坊主にやるよ、どうやら俺のベルトには合わねえみたい
だし、それにお前の方が上手く使ってくれそうだからな。じゃ」
そういうと二吉さんは廊下の奥へ消えていった。

陰「とりあえず帰ろっか…」

俺たちは部室へ戻つた。

第18話【黒神、ひとつになる刻】

「もう1回作戦を決行する！来てくれ！」

昨日の失敗から翌日、さつそく電話が来た。

山 「もう作戦思い浮かぶなんて、対怪人組織はさすがだな…」

陰 「そうだね…」

山内も陰道も疲れてる様子だ、まあ長時間待たされたから仕方ない。

械 「じゃあ部室で待つてるか？」

山 「俺はそうさせてもらうわ…」

陰 「私は行こうかな」

山 「おつ、じゃあ頑張ってこいよ」

そういう俺たちはSRHへと向かつた。

山 「最近あいつらしい雰囲気だな…」

（SRH）

二 「2日連続で来てもらつてすまない、さつそくだが作戦を実行する。着いてくれ」

械 「は、はい！」

俺は言われるがまま二吉さんについていった。

二 「作戦内容はみんな知つているな！さつそく現場に…」

械 「ええちよ、ちよつと待つてください！」

二 「どうした？何か問題があるのか？」

械 「いや…俺作戦内容聞かされてないんですけど…」

二 「作戦内容は前回と同じだ、前回よりももつとはやくあのルール変えるやつのところに行き、倒す！」

械 「えつっ！、それ大丈夫なんですか…？」

二 「やつてみないと分からぬだろ」

械 「いやまあそうなんですけど……もつとこう…」

二 「他に作戦つていつたつて相手が有利にはたらく場所なんだ、は

やく倒す以外ないだろ」

械「そ、そうですね‥」

二「てことで、行くぞ！」

俺はかなり不安になつた。

「行く途中」

二「そういうえば、昨日渡したボトルは試したか？」

械「はい‥けど何度もやつても変身出来なくて‥それに何度も暴走しかけるし‥」

二「ほう、暴走はどうやつて止めたんだ？」

械「あまり自覚はないんですけど暴走する時はこう‥黒いもやつとしが迫つてくるんですよ。けどそれは別にめちゃくちや悪いものつて訳でもない気がして受け入れてしまう時もあるんです‥。今回は受け入れる前にボトル外せたからいいんですけど」

二「神の力つてのは意外と大変なんだな」

そう話していると俺たちは現場に着いた。

「船上」

俺とSRHの人達はこの間の船の上にいた。どうやらここが最後の入口らしい。

二「ルールは入口によつて変えられる、だからこの入口のルールが変えられた時点で俺たちの負けが確定する。」

二「速攻で決めるぞ、坊主」

械「はい！」

二・械「変身！」

『神話覚醒!!アルケミストマツチ!!!UMAワープTheキック!!』

『調整!メカニクスマツチ!You are fight?冰雪キック!』

キング!

仮面ライダー！ フブキ！』

俺たちは裂け目に入った。

「裂け目の中」

また村に出た。しかし今はそれに構っている暇はない。

『ドライブイングウインガーハイテク』

バイクを出し走らせる。フブキは足先から氷を出しスケートのよう滑る。その速さはバイクに追いつくほどだ。

俺たちはすぐに奥地に着いた。

怪「む？ また仮面ライダーか、まあいいルールを…」

フ「そうはさせねえ！」

フブキは敵の方に滑つていきルールを変えようとする敵の手を止める。

フ「ほう、中々やるようだな。しかしその程度では…！」

ホ「させるか！」

ショットガンを取り出そうとする怪人の近くにワープしショットガンを取り上げる。

怪「くつ…厄介だな…」

ホ「これなら…！」

怪「勝てると思つたか？」

俺たちがそいつを抑えていると奥からもう一体怪人が現れた。

怪「やれ！ シーラカンスブレイキンド！」

シ「は！」

シーラカンスは杖を掲げる。すると足元から誰かが引きずり込もうとしてくる。

ホ「なに？」

俺は抵抗するも虚しく引きずり込まれてしまつた。

⋮

……

ホ 「どこなんだこ……？」

気が付くと辺り一面真っ暗な場所にいた。この場所がどんな形を
しているのか、無限に広がってるのではないかと思うほど暗かつた。
だが上から少し漏れる光により少しの視界は確保されていた。

ホ 「脱出する方法はないのか……」

するとどこからか声が聞こえた。

？ 「脱出する方法なんてない。」

振り向くとそこには俺がいた。

ホ 「どういうことだ……？ これは敵の罠なのかな……？」

械？ 「敵のせいではあるがお前のせいでもある！」

ホ 「おい待てって！ 俺なら話し合うことだって！」

械？ 「そんな余裕はない……！」

もう1人の俺はドライバーとナックルを取り出し変身した。
その姿はホロスだった、しかし色は全く違ひ黒いアーマーを着てい
た。

ホ 「お前の言つてること、よくわからねえよ！」

黒ホ 「お前は考えたことないか？ もし市民が、同級生が……サナが死
んだりしたら……！」

ホ 「……そりやあるけど……今までだつて守つてきただろ！」

黒ホ 「俺の力があつてこそだろ、俺が戦う……お前にとつては暴走す
ることで守つてきた！」

ホ 「そうかもしれないけど……けどお前の戦い方じやいつかサナだつ
て殺すことになるぞ!!」

黒ホ 「……」

もう1人の俺の動きが止まつた。

ホ 「お前は……俺は多分、みんなを……サナを守りたい気持ちから生ま
れたもう1人の俺なんだろうな……」

黒ホ 「……」

ホ 「俺も……俺に比べたら気持ちは弱いかもしけないけど、今までも

……これからも必ずみんなを守つてみせる。だから……」

黒ホ「協力しろってか?」

ホ「…ああ」

黒ホ「…まあいい、俺には俺の足りなかつた何かを満たしてくれることもしないからな。だがもしサナが危険な目にあつたらその時は俺を殺してでも俺がサナを守るからな。」

ホ「ああ、絶対そうしないつて約束しよう」

黒ホ「その言葉、信じるからな。」

そういうともう1人の俺は俺に歩み、俺の中に消えていった。

（裂け目の中）

怪「もう！ホロスをどこにやつたんですか!?せつかく捕まえたと思つたらどつか行つちやうし！」

シ「す、すいません…」

怪「すいませんで許され…」

ホ「ここにいるぞ！」

怪「あら？ ホロスの声が…これは…下？」

シーラカンスの化け物は地面を叩く、するとシーラカンスの化け物は上半身をぶち抜かれた。

ク「坊主…！なんだその姿？」

ホロスの姿は両腕がロボットアームの姿になっていた。

ホ「はは…まあ色々あります、それより二吉さんは大丈夫なんですか!?」

ク「まあ…あんまり大丈夫じゃないな」

クリムゾンの上半身のアーマーは半壊しており、二吉さんの顔が見えていた。至る所が燃え、凍つている。おそらくは想像もできないほどすごい戦いをしていたんだと思う。

怪「ホロスー！どこに行つてたんですか？それにしてもせつかくの深海魚を倒すなんて…もつたいない」

ホ「お前と話してる暇はないんだ！すぐ倒させてもらう！」

怪「ほお…この短時間でよほどの自信をつけてみたいだが、その

フォームはもう知っている、ルールを変えればいくらでも…

ホ「知らないフォームならいいんだな?」

怪「なに…?」

俺は昨日貰ったボトルを取り出した。

ク「おい!そいつは暴走するんじゃなかつたのか?今の俺じゃ、止めることも難しいぞ!」

ホ「平気ですよ、二吉さん」

俺はそのボトルをベルトに装填し、レバーを回す。

『神話覚醒!アルケミストマッチ!ビーストTheディフェンス!B
STデイフェンダー!!』

俺の姿は金と黒のアーマーに包まれる。左腕にはロボットアーム型のガントレットが装備され右腕には小型の盾のようなものがついていた。

ホ「速攻でケリをつけさせてもらう…!」

稻妻のように一瞬で怪人の後ろに回り蹴りをいれる、不意を突かれた怪人は体制を崩す。

ホ「このまま一気に!」

俺はガントレットにあるボトルホルダーにバイクのボトルを装填する。

『スピニングウインガー!』

ガントレットからはタイヤやマフラーのような装飾がつけられ、煙をふかす。そのまま勢いよく突っ込み一撃を加えた。

怪「がつ…!」

ホ「トドメだ!」

ベルトのレバーを回し、ガントレットにホロスのボトルを装着する。

『アルケミストファイニッシュ! ガッチングブレイク!』

ガントレットは形を変え本来の形であるロボットアームに変わる。

左腕を突き出し怪人の胴体を貫いた。

怪「ぐわああ!!!」

怪人は爆散した。

俺たちは変身を解いた。

械「村のブレイキンドには感謝しなきやな」

二「ブレイキンドに感謝つて正気か?」

械「ブレイキンドがくれたこのボトルが無ければこいつは倒せなかつた。そして俺自身に向き合うことも」

二「? まあいい、先帰つてるからな」

俺は村のブレイキンドに感謝の気持ちとして黒ホロスのボトルを渡した。

ブ「えつ、いいんですか? 私たち、いわゆる人類の敵つてやつなんですよ?」

械「いいんだよ、君たちが悪いことしないっていうのは直感で分かるからさ、それにこのボトルはもう1人の…俺にとつてもいらぬからさ」

ブ「それならありがたくもらつておきます!」

械「おう!」

俺たちは現世に戻った。

第19話【対峙、もう1人の神】

「ブレイキンドが出た!?」

昼過ぎ、一吉さんから連絡があった。どうやらブレイキンドの残党が湧いたらしい。

械「すぐ行きます！」

俺は部室を飛び出し現場に急行した。

（現場）

械「ブレイキンドはどこだ!?」

周囲を見渡す、するとそこにはブレイキンドだつたと思われるものがあつた。

械「誰の仕業だ…？焦げてる…クリムゾンか？」

？「そんなのと一緒にしないでほしいな。」

械「誰だ！…聞いた事あるなこの声」

？「思い出したのか、覚えてたのか…まあどちらでもいい、久しいなホロス。」

械「ラ…」

ラー「お前はずいぶん姿を変えたようだな、まあ私と違い継承することで生き延びることを選んだようだしな。」

械「その話は…知らないな」

ラー「完全に思い出した訳では無いのか。まあいい、教えてやろう。」

「あれは今から何千、何万年前の話、ホロスとラーというライダーが誕生した。そしてそれから数年後、ヤツが現れた。」

械「ヤツって誰だ？」

ラー「後で言う、黙つてろ。」

「ヤツは多くの文明を破壊していくた。それを阻止するため俺たちは

力を尽くした。結果ヤツを封印という形で止めたが…その時に俺たちは人智を超えてしまった。俺は神として、ライダーとして一体化の道を選び、お前は人を思い、神としての道を逸れライダーシステムとしてたくさんのかくの刻を過ごした。」

械「で、ヤツって誰なんだ？」

ラー「はあ…文明を破壊した、シヴィイトロイつてヤツだ」

械「それで、そいつがどうしたんだ？」

ラー「復活した、おそらくだがブレイキンドの怨霊とでも言えばいいか、それがシヴィの元に集まり封印を解いた。」

械「そんな…」

ラー「よく考えたものだ、ブレイキンドを放置すればそのまま滅び、倒せば自分が復活する。ほんとに汚い野郎だ。」

械「じゃあ倒しに…」

ラー「無理だ、少なくとも今ままのお前ではな。暴走を克服したのは褒めてやる。しかしこまだ甘いところがある、そんなんじや返り討ちにあうだけだ。」

械「じゃあどうすれば…」

ラー「俺を超えてみせろ、試練だ。俺と戦い、お前のその左手を俺に触れられたらお前を認めてやる。」

械「そういうことなら…！変身！」

『アルケミストマッチ！』

俺は変身すると同時に大きく加速し触れようと/or>する、しかしラーは既にはるか上空にいた。

ホ「…ツ！ いつの間に！」

ラー「場所を変えよう。」

すると周りは住宅地のようになる、しかし人気はなかつた。

ラー「もちろん反撃はさせてもらう。試練だからな。」

そういうとラーは手から光球を出す、それはどんどん膨らんでいきこちらに向かつて落とす。

ホ「まずつ……！」

咄嗟にボトルを変えＵＭＡキックになる。ワープをしなんとか回避する。

ホ「このまま！」

俺はやつの後ろにワープし触れようとする。

ラー「そんな子供騙しが通用すると思うなよ。」

ラーは俺の左手を交わしカウンターの後ろ蹴りをしてくる。

ホ「ぐつ……！これが通用しないなら！」

俺は体を液状化させ街に溶け込む。ビルを移動しラーがこちらを見失うタイミングを伺い攻撃に出る。

ホ「今！」

周りから紙のようなものを出し奴を捕らえる。そしてビルを蹴り飛ばし大きく加速し触れようとする。

ラー「さつきよりかは考えたようだが、まだまだだな。」

四肢を燃やし紙を振りほどくとパンチを繰り出してくる。

ホ「これは……受け止める！」

ラー「なに!?」

俺は右腕に備えられている盾でパンチを受け止め。左手を出す。

ラー「隠れている間にフォームチエンジとは想像以上だ……だが！」奴に触れようとすると目の前から姿を消す。周囲を見渡すと地面に着地していた。

ラー「今のは瞬時に動いただけだが、ヤツはこの世界の事をよく見てる。お前やクリムゾンの力はヤツも使えると考えていい。」地面に降りつつラーに問う。

ホ「ここでの戦闘は平気なんですか？」

ラー「ああ、ここは俺が作り出した特別な空間だ。人間はもちろんヤツも見れない。」

ホ「なら…好き放題できますねツ……！」

左腕のホルダーにバイクのボトルとホルスードのボトルを装填する。

『スピニングワインガー！』

『ゴッドバード!』

バイクとホルスードは姿を変え、巨大な丸のこチエーンソーのようになる。

ホ「ブイブイ言わすぜ…！」

チエーンソーと化したタイヤを回転させ地面を引き裂きながら進んでいく。

ラー「今のお前にはそんな芸当も出来るのか。」

ラー「上空へ逃げる。」

ホ「これは予測済み…！」

タイヤを地面から引き剥がしそこから羽を飛ばす。

ラー「ぐつ…」

ラーは一撃喰らいやろける。俺はタイヤを地面に突き立てその反動で上空へ上がる。

ホ「これで!!」

『アルケミストファニッシュ！ グラッピングクロー！』

タイヤは瞬時に巨大なクローに変わりラーを捕らえる。

ラー「ツメは燃やせないが…だがさつきと同じだ！」

ラーは力尽くで抜け出しカウンターを仕掛ける。

ホ「そこに俺はない！」

金色の装甲のみをその場に残し、俺は黒い鎧につつまれたホロスになる。そしてラーの死角からロボットアームを喰らわせた。

ラー「がはつ…！…これで試練は終わりだ。」

ラーは一瞬ダメージを負ったような反応を見せたが、すぐに切り替えた。

械「ありがとうございます。ラーさん」

ラー「言つておくが、シヴィトロイはこんなもんぢやないぞ。もつと力を最大限使うんだな。」

械「はは…ラーさんは一緒に戦つてくれないんですか？」

ラー「神になつた代償か、人の世にあまり長くいれないんだ。すま

ないな。」

械「そうなんですね…」

ラー「まあ、頑張れよ。それと、お前にこれを渡しておく。……そ
という時に使うんだな。」

械「これは……はい、俺がこの世界を守つてみせます…！」

ラー「…頼もしいな。」

そういうとラーは天空へ消えていった。

第20話【最終決戦、未来への道】（1）

「あつちい～」

俺たちはいつものように部活に行き、そして探検をして楽しんできた。

そんなある日……。

「明日はいつもよりはやく集まらない？」

そう提案したのはサナだつた、なにかあるんだろう。俺たちはその提案にのつた。

その夜、不穏なニュースが流れていた。

「――街で突如として爆発が……」

械「まだ残党がいたのか……？」

（翌日）

械「さすがに朝は冷えるな……」

俺は待ち合わせより30分も早く着いていた。

それから10分、最初に現れたのは山内だつた。

山「お、械都のくせに早いじゃないか」

械「くせには余計だぞ」

そんな会話をしつつ、サナを待つていた。
30分が経つた。

山「なあ、遅くないか？」

械「まだなにか準備してるんだろ、10分ぐらい遅れることもある」「それから1時間が経つた。

山「おい、もうそろそろ登校しないと遅刻だろ、先学校行つてよう

ぜ」

械「可哀想な気もするが……まあ連絡しとけばいいか」

俺たちは学校へ向かっていた。そして学校が見えてきた時、異変に

気づいた。

山「おい…なんか焦げ臭くないか?」

械「確かに…つて、学校が！」

ここからでは見づらいが、確かに学校から煙が上がっているのが見えた。

山「おいおい！怪人の仕業か!?」

械「それしかないだろ！俺は先に行く!!」

山内に鞄を押し付け走り出そうとした時、学校の1部が爆発した。

械「…ッ！なんか不味い氣がするぞ…！」

俺は学校に向かつて走る。

校門までたどり着くと、逃げ惑う生徒や学校に取り残された教員などがいた。空を見るとそこには原因と思われる怪人がいた。そいつが攻撃しようとしてる先を見るとサナがいた。

『神話覚醒！アルケミストマツチ！ビーストTheデイフエンス！B
STデイフエンダー!!』

『UMAキック！』

『デイフエンダーシールド！』

考えるよりも先に体動く、UMAキックでより早く動きシールドを広げる。

サナは守れたが一撃でシールドが破壊された。

ホ「おい、お前がシヴィイトロイってやつか？」

すると怪人はマントを取り名乗った。

「いかにも、私がシヴィイトロイだ。」

ホ「誰の女に手出したか分かつてんのか？」

シ「わかっているよ、だから攻撃したんだよ。」

ホ「どんなやつかと思ったらこんなクズだつたとはな、容赦無しで戦えるつてもんだ」

『UMAキック！』

俺はUMAキックを再度腕に装填し分裂する。そして分裂した俺はサナを山内に預けた。

ホ「頼んだぞ山内」

山「わかつた、お前も生きて帰つてこいよ！あんな」と言つたんだから陰道を悲しませるようなことはするなよ」

ホ「ああ…」

シ「無駄なあがきを…どうせお前も、他のみんなも、あの女も滅ぼされるのになあ！」

ホ「そうはさせない！」

俺はホルスードを纏い、

もう1人の俺はマントを羽織る。

『アルケミフィニッショ！ホルスード！』

『アルケミストマツチ！ ホロスカイザー!!』

ホ「いくぞ！」

俺は翼を開き上空へ舞う、そして足のクロ一を開き急降下攻撃を仕掛けれる。

そして俺は大きく跳躍しロボットアームを開き、アツパーを仕掛ける。それらの攻撃はシヴィットロイに直撃した。しかしビクともしなかつた。

シ「今のホロスはこの程度なのか？」

シヴィットロイは俺を簡単に押し返すと黒いホロスに蹴りを喰らわせる。黒ホロスは一撃で跳ね返され、俺に戻つてくる。

ホ「カイザーになつてたつていうのに一撃だと…!?」

シ「ホロスの事はなんでも知つていてる。少々イレギュラーな存在なお前だが、それでも見ていたからな、知つていてるぞ。ふん！」

ホ「ぐはつあ!!」

シヴィットロイは俺を掴むと地面に叩きつけた。

シ「お前は知らないだろう、昔のホロスを」

そういうどこからか鎌を取り出す。

シ「お前のその左腕と違つて、昔のは鎌を使っていたんだよ。」

ホ「だからどうしたー！」

ガントレットを展開させ無謀にも突つ込む。

シ「こういうこともできるんだよ」

そういうとシヴィトロイは装甲のわずかな隙間を突き、俺からホルスードを引き剥がし、ホルスードを切り裂いた。

ホ「ぐつ……なんてこと…！」

シ「邪魔だつたからな、仕方ないだろう？」

ホ「くそ……圧倒的すぎる……だけど、みんなを守らなきや…！」

シ「諦めるか？そつちの方が楽だからありがたいがな」

ホ「どうすれば…！」

？「俺を忘れてないか？」

声がした方を見るとそこには二吉さんがいた。

ホ「二吉さん！」

二「遅れた、ちよつと良いもんを作つてもらつてたからな！」

シ「お前は……ああ、人間が生み出したライダーにも満たないやつか。」

二「それはどうかな」

そういうと二吉さんは縁の箱を取り出した。

シ「それは…直したということか？まあそれはもう知つているからな、どうということはない」

『コマンドQ！フルウェポン！』

二「完全な状態での、完全な姿を見せてやる、変身！」

『完全調整!!ビルドブレイクマッチ!! You are fight?』

弾丸バースティング!!

仮面ライダー！－！コマンド！C／F／W／S!!』

上半身はクリムゾンの上から雷雲のような刺々しい重装なアーマーがとりつけられる。下半身はフブキの上から龍巻のような螺旋状の装飾が加えられる。そして色はモスグリーンに変わり、頭は放射

状に広がつて4本角のようになる。瞳は黄金に輝いていた。

そして両腕、両脚、そして背中にも武装をつけた姿に変わる。

シ「なに…!?」

コ「言つただろ、完全な姿を見せてやるつてな。いくぞ!!」

コマンドFWは俺を追い越しシヴィトロイへ攻撃を加えようとする。

第21話【最終決戦、未来への道】(2)

「言つただろ、完全な姿を見せてやるつてな。いくぞ!!」

コマンドFWは俺を追い越しシヴィトロイへ攻撃を加えようとする。

コ 「これでも喰らえ！」

『アサルト!』

コマンドFWの瞳は赤く輝き四肢の装飾が大型化しエネルギーを束ねる。そして右腕に収束し拳を喰らわす。

シ 「ぐつ…！」

コ 「まだ終わらねえ！」

『ライトニング!』

コマンドFWの瞳が黄色に輝く、シヴィトロイの反撃を躱し突き刺すような蹴りが炸裂する。

シ 「ぐはつ…人工ライダーのくせにい！」

シヴィトロイは鎌を取り出し切り裂こうとする。

コ 「そんなの装甲1つでどうにかなんだよ！」

鎌を腕で防ぎ装甲が持つていかかる。だがコマンドFWはすかさず反撃をし鎌を吹き飛ばした。

コ 「これで！」

コマンドFWは拳を突き出すがシヴィトロイはそれを受け止めた。シ「所詮は子供騙しにすぎない、少しの変化だつたから理解するのに時間はかかるなかつたよ。」

コ 「なつ…分かつた気になるなよ！」

コマンドFWはシヴィトロイから離れ全身の武装を放つ。シ「もうなにをしても無駄だ。」

シヴィイトロイは飛んできたミサイルなどを避ける、誘導が切れたミサイルは住宅地へ落下しそうになる。

ホ「まずい！」

再生しきらない体に鞭を打ちなんとかミサイルに追いつく。

『ティフェンダーシールド！』

ボロボロのシールドを広げなんとかミサイルを受け止めるが、
ホ「ぐわああ！！」

俺の体は守りきれずダメージをおつてしまつた。

コ「すまねえ、坊主！」

コマンドFWは詫びるとふたたびシヴィイトロイの方に向かう。

コ「今完全に動けるのは俺しかいねえんだ！俺がなんとかしねえと
……な！」

『アサルト！』

左脚にエネルギーを収束し回し蹴りを喰らわす。シヴィイトロイは身構える。

シ「ぐつ……」

コ「まだまだあ！」

『アービタ―！』

シヴィイトロイの動きはざんと重くなる、だがシヴィイトロイは身構えたままだつた。

コ「おらあ！」

コマンドFWは火炎放射を食らわせる。

シ「そろそろか……」

コ「なにボソボソ言つてんだ！……ツ！そろそろ時間か、これでトドメだ！」

『コマンド!!クリムゾン!!フブキ!!ウインド!!スパーク!!フルバーストトイニッショ!!』

コマンドFWは上空へ飛び右脚を突き出した。

コ「はあああ!!!」

シ「この時を待っていた。」

シヴィトロイはライダー・キックをひらりと躲す。コマンドFWは多色の輝きを失っていた。

コ「まさか…ぐわつ！」

コマンドFWはシヴィトロイに首を掴まる。

シ「だから言つただろう？理解したつて。

君のその能力は時限制だ、時間切れになるのを待っていたんだよ。」

コ「小癪な……」

シ「ここからは私のターンだよ。まず最初に、君の能力を真似させてもらおう。」

シヴィトロイの目は赤く怪しく光り、紫のオーラを纏う。

シ「ふん…！」

そしてコマンドFWに向かつて蹴りをいた。

コ「ぐはっ！」

コマンドFWは大きく吹き飛ばされ装甲が崩れ落ちていく。

シ「もう終わりかな。さつきまでの威勢がなくなつて悲しいよ。」

コ「まだだ…まだ終われない…！」

瓦礫をどかしコマンドFWが姿を現す。装甲のほとんどは剥がれ落ち、割れた仮面からは二吉さんが見えていた。

コ「俺の……この力を最大限ぶつけてやる!!」

コマンドFWは腕の時計を強引に起動させ、シヴィトロイに突っ込んでいく。

コ「うおおお!!!」

シ「何をしても無駄だ。」

コ「はああああああああ!!!!」

左半身を前に出しタックルするようにシヴィイトロイに接触する。

シ「ぐおおおおああああ!!!」

そして大きな爆発が起こる。

釋名卷之二

燃發が取るとホロホロはなく、た一括りんが現れた
二「すまぬえ……俺ジや時間稼ぎばつ、こゝかなかつなか

（三）時間積み重ねしたがために力が大きい

「そんな……とりあえず安全な場所まで！」

二 「すまねえな…」

一吉さんにマントを渡し、安全な場所まで案内しようとする。しか

し

に許せん…！」

爆発の中からはシヴィイトロイが現れる。

二 「なに…!?俺の全力は時間稼ぎにもならなかつたのかよ…!？」

シ「貴様にも絶望を与えてやる……！」

シヴァイトロイは手を上にあげるとエネルギー弾を生成し始める。

それほどんどん大きくなる。

シ「お前の前にます」の街を破壊してやる……！」
「ううう！」

二十九

シテからこの街は滅てるんだよ。お前のお前たちのせいでなあ

シヴィイトロイはエネルギー弾を街の方へ発射する。

亦「そうはさせない…！俺はこの街を…みんなを守るんだ！！今こそ

ラーサンに呼び戻して貰つた力を使う!!」

俺は紫をボトルをベルトに装填した。

シ「ははは……！滅びろお！！」

エネルギー弾はどんどん街へ近づいてゆく。

ホロスは上空でエネルギー弾を受け止め、それは上空で爆発した。

シ「なに…!?」

爆風から姿を現したホロスは、紫色の体に翡翠の目を持つフォームになっていた。

シ「なんだ…その姿は…!?」

『アルケミストマッチ！伝説覚醒！ライダーワードThe 矛盾!!』

ホ「もう一度使わせてもらいますよ…！…この力!!」

第22話【最終決戦、未来への道】(3)

「もう一度使わせてもらいますよ……この力!!」

俺は文字で戦うライダーの力を再びこの身に宿す。

シ「なんだその姿は…?!」

ホ「お前には分からぬだろうな！俺もよく理解してないけどなツ！」

『天空の鳥人間』の能力でシヴィットロイの目の前まで迫り、盾につけられた槍をパイルバンカーの要領でシヴィットロイにぶつけた。

シ「がはつ…!!」

シヴィットロイは大きく吹き飛ぶ。

シ「くそ…！別の世界のライダーだと…!!」

俺は吹き飛ばされているシヴィットロイに跳速的な速さで近づく。そして『怪力の剛剣士』の力で腕アーマーを巨大化、シヴィットロイを地面に叩きつける。

シ「ぐつ……」

土煙が立つ、俺はそこから離脱し槍を弓に変化させ構える。

ホ「いつでもでてこい…！射抜いてやる…!!」

土煙が晴れるのを待つと、そこには先程までとは違うヤツがいた。シ「思い返せば…ここにも別の世界のライダーが来ていたな…そいつの姿を真似させてもらった。」

シヴィットロイはマゼンタの鎧を纏い、板状の装飾を角飾りのように装着した。

ホ「なつ…!?その姿はある時の…!!」

シ「これで対等、いや私の方が優勢と言えよう。」

『カイジンライド！　ノーキナウ…！』

デレモどきシヴィットロイの隣にはモスグリーンと青緑の怪人を召喚した。

ホ「それもデレイズが出してたやつか……！」

シ「これで1vS2だ。」

ホ「もう忘れたのか？」

俺はBSTに姿を変え装甲をパージ、黒いホロスを作りだす。そして再びワードフォームになつた。

ホ「お前は2vS2のつもりだが、違うな。そのモスグリーンと青緑の奴のこと、見ただけで何も知らないだろ」

シ「なに…!?」

ホ「ちゃんと借りた力に、見ただけの知ったかぶりが勝てるかよ！」

黒い俺は跳速で怪人に近づき矢をダガーのように逆手持ちし、刺殺した。

シ「くっ…！」

ホ「次はお前だ！」

俺は黒とひとつになり必殺技を放つ。

『Break Spear!・アルケミストファイニッシュユ!!』

槍を取り出し先端に力を集中させる、渾身の一撃をデイレもどきシヴィトロイに直撃させた。

シ「ぐわああ!!!」

デイレもどきの装甲が剥がれ落ち、シヴィトロイは爆発した。

ホ「やつたか…!?」

爆発が落ち着き、目をこらす。爆風の中にはシヴィトロイがいた。

ホ「くっ、しぶといやつめ…！ならもう一度！」

俺はもう一度必殺技を発動させ、今度は蹴りを加える。しかしそれは受け止められた。

ホ「なに…!?」

シ「そうだな…お前の言う通りしつかりとした理解が必要だ…。その為に私は…この世界を飲み込むことにした。」

ホ「お前何言つて……!?」

シヴィトロイの体は溶けるように馴染んでいく。

ホ「不味い…！」

俺は跳速の力で何とか抜け出す。

ホ「なんなんだ…!?」

シヴィトイの体はどんどん溶けるように消えていく。そして空は紫に曇る。

ホ「ほんとになんなんだよ…！」

どこからか…強いて言うなら空からシヴィトイの声が聞こえてきた。

シ「まだ分からないのか？この世界を私の一部にするんだよ。人も、街も、全て私のものに…!!」

最終回【最終決戦、未来への翼】

「まだ分からぬのか？この世界を私の一部にするんだよ。人も、街も、全て私のものに…！」

シヴィートロイは姿を変え街を覆う。空は紫に染まり、建物は次々と消えていく。

ホ「こんなのどう対抗すればいいんだよ…!!」

シ「対抗など出来るはずない！…そうだ、面白いことをしてやろう…！」

空はそういうと建物を消すのとは対称の力で街の人を怪人にしていく。

ホ「なつ…！まざい!!」

俺はベルトにB S Tを装填する。

『神話覚醒！・アルケミストマッチ！・ビーストTheディフェンス！・B S Tデイフェンダー!!』

『ワード！』

翼を広げ街の方へ飛んでゆく。

「う”お”お”お”!!」

ホ「くつ…すまない！」

怪人に変えられた人を弓で射抜き元に戻していく。しかし怪人に変えられる人が時間とともに増えていった。

ホ「このままじやまざい…！」

次第に対処し切れない量になり街は怪人で溢れかえった。

ホ「くそつ…これじやあラーさんとの約束も…何もかも無駄になるじやないか…!!」

半ば諦めつつも怪人になつた人を戻していく。すると追いかけられている黒ずくめの人たちを見つけた。

ホ「あれは…サナ達か！カイザーのマントがあれば被害は受けない

が……あれは時間の問題だぞ」

俺はその方向へ全速力へ飛び黒と分離する。俺たちは怪人達を蹴散らし、サナ達のところへ向かつた。

陰「なに…!? って械都か…よかつた…」

ホ「大丈夫…ではなきそそうだな」

陰「こつちはまあ…」吉さんが合流してくれたのもあつてなんとか

平氣」

ホ「ならよかつた、…ありがとうございます、二吉さん」

二「ライダーの力が無くなつたぐらいでめげてたら生き残れないしな、とにかくこつちは俺に任せろ！」

ホ「ありがとうございます、けど念のため黒ホロスをここに残します」

黒い俺は頷く。

二「ああ…そうか、分かつた。」

ホ「じやあ俺はこの辺で、サナも生きてくれよ」

陰「うん…械都もね」

ホ「わかつてる」

俺は再び空へ飛び上がる。

俺は怪人にされた人を戻しつつ対抗手段を考える。この間にも建物は消され、人々は怪人と化していく。

ホ「くそ…時間がない…! どうすれば!」

試しに空に向かつて矢を放つが矢は飛ぶだけ飛び落ちる。

ホ「やつぱりダメか…」

俺はまだ消されていない建物の屋上に降りる。

ホ「こうなつたらあれしかないのか…」

それは最初に思いついた手段だつた、しかしそれではラーにもみんなにも迷惑をかけてしまうことになる。しかしそれ以外の方法は残されていなかつた。

ホ「すまない…ラーさん…サナ…!」

俺はラーの力の半分が入つたワードのボトルをロボットアームで

粉々にする。ボトルに入っていたラーの力を吸収し、完全な神へと神化を遂げる。

ホ「これならいいける…！」

俺はサナとそれ以外を守るために迫り来る怪人を蹴散らす。表の俺を演じ避難を命じる。

黒「こつちに逃げよう！」

表の俺が飛んでる関係もあり上からの視点は確保出来ていた。俺は出来るだけ怪人が少なく、被害が無い方へ誘導する。たとえ怪人が立ちはだかろうと絶対にサナだけには近づけさせまいと獅子奮迅する。

黒「邪魔をするな！」

怪人をあらかた片付けさらに進む。するとすぐ後ろのビルの窓が割れた。

黒「なにつ!?」

まるで待っていたかのように奇襲をしかけてくる怪人。最後方にいた二吉が怪人に狙われる。

黒（くそ…あいつとの約束だからな…！） 「おっさ……二吉伏せろ！」

俺は振り向くと同時にスラスターを吹かし今にも襲おうとする怪人の土手つ腹に巨腕を叩き込む。

「ぐぎやああ！」

怪人は吹き飛ばされ、人の姿に戻る。

黒「大丈夫…ですか、二吉さん」

二「あ、ああ…それより今おっさんつて…」

黒「早く進もう！」

目的地の空き地に入ろうとした時、表の俺が建物へ降りた。

黒（おい…何考えてるんだ…？）

そしてあろう事か唯一の対抗手段のワードのボトルを割ろうとし始めた。

黒「お…！」（おい！なにしてるんだ…？）

そしてワードの成分に混ざった何かを浴びると、通信が途絶えた。

黒「なつ…まさか……サナを悲しませないつて約束だつたのに…

!!」

完全な神へと神化した俺はシヴィトロイと同じように、皆を理解しようと、そして皆を守ろうという気持ちを強める。そしていつしか空を覆うほどの翼を開く。

純白のホロスは金色の装甲からは翼が生え、機械のようなアーマーは無くなりロボットアームはB S T 同様ガントレットになる。しきそのガントレットはB S T とは違い皆と手を繋ぐための優しいものへと変わっていた。

シ「まさか…そんなはずはない！中途半端な存在のお前が！完全な存在になれるはずが!!」

ホ「そのまさかだよ…！おれもしなくなかったが、お前を止めるにはこれしかなかつたからな…!!」

シ「しかし攻撃出来ないのは同じ…まだ私にも勝機が…」

ホ「そんなはずないだろ！」

翼から鱗粉のようなものを散布する。空の一部から閃光が舞いそこからシヴィトロイが姿を現す。

シ「これが真の神の力だというのか…!!」

ホ「お前だけは…絶対に許しはしない！」

俺は小さな翼を収束し足に纏う。

『ゴッドホロースード！アルティメットファイナーレ!!』

加速するたびに金色のオーラを放つ足をシヴィトロイの胸部にぶつける。

ホ「はあああああ！！！」

シ「ぐううわああああ！！！！！」

シヴィトロイは金色のオーラに包まれ、消滅するかのように塵となり消え去った。

しかし空はもちろん、建物や人々は元に戻らない。

ホ「やはり……一度こうなつてはダメか……。」

俺はサナ達に最後の言葉を伝えるために地上に降り立つ。

陰「眩し……！あれが、覚醒したホロス……械都は平氣なの！」

ホ「平氣だよ、だけどもう、戻れないんだ。」

陰「なにそれ……必ず戻るつて約束は……！」

ホ「すまない、けどたまには顔見せられるとと思うから……。」

陰「そうじやないよ！あれを倒したらこれからは械都と……色ん

な思い出作つて……色々したかったのに……これじゃあ……。」

ホ「……、俺もこうはしたくなかった……だけどもう遅いんだ。」

陰「そんなのつて……。」

山「そんなのつてないだろ……まだこの世界にはサナや他にも、色

んな人がいるだろ！それはどうするんだよ……。」

ホ「そのことについてだが……もう1人の俺に託そうと思う。これか

らも守つてほしい、頼んだ。」

黒「……最低だよ、お前」

ホ「……分かつてる。お前にも申し訳ないことをした。」

そう言い残すとホロスは汚れた空を、街を戻そうと翼を広げ再び鱗粉のようなものを散布する。建物は戻り怪人達は人の姿に戻る。

そして空がいつものように青くなると同時に、ホロスは消えた。